

泉大津市文化財調査概要4

豊中遺跡発掘調査概要Ⅲ

1979.3

泉大津市教育委員会



泉大津市文化財調査概要4

豊中遺跡発掘調査概要Ⅲ

1979.3

泉大津市教育委員会

序　　言

このたび豊中遺跡調査報告第3集を世に送ることになった。

近年の急激な開発の進行によって、全国各地で多くの埋蔵文化財が破壊されていった。まことに悲しむべきことである。我々文化財行政の関係者は、単にそれを憂えるだけでなく、できるだけ文化財を破壊から護り、よりよく保存し得るように全力を傾けなければならない。

ただ開発を全く頭から否定し、完全にくい止めようとするとは、社会が発展してゆく以上不可能であろう。我々が努めるべきは破壊を最少限にくい止められるような体制整備を図ることと、開発が行われる場合には適切な発掘を行うことによって、遺跡・遺構の原状ができるだけ保存し、その実態を正確に記録し報告することであろう。

本書の如き、開発に伴う緊急調査の目的は正にこのようなるところにある。ただ恨むべきは、調査報告が全く行政的な見地からのみ促進され、学問的見地からする検討が十分に加えられない嫌いがあることである。学術的見地からいえば、数カ月又は数年をかけて作成すべき報告も、十分な検討を経ずに拙速で仕上げねばならぬのが実情である。まことに疑問に感ずるところである。しかしながら、担当者としては与えられた悪条件のなかで最善をつくしたものと信じている。ささやかな本稿が学問の進歩に何程かの寄与をなし得れば幸いである。

昭和54年3月

泉大津市教育委員会

教育長 中辻 捨二郎

例　　言

1. 本概要報告書は、泉大津市教育委員会が、泉大津市豊中に所在する豊中遺跡の範囲内において、開発行為に先立って実施した発掘調査記録である。

2. 本調査は、国庫補助事業および府補助事業（総額5,000,000円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として計画し、実施したものである。

3. 本調査は下記の構成で実施した。

調査主体者 泉大津市教育委員会 教育長 中辻捨二郎

調査担当者 坂口昌男（泉大津市教育委員会社会教育課）

調査員 佐藤正則

事務局 泉大津市教育委員会社会教育課

4. 調査は昭和53年度事業として、昭和53年6月1日に着手し、昭和54年3月31日に完了した。

5. 本書の作成は、坂口昌男、佐藤正則が分担した。なお作成にあたっては白木祥代氏の協力を得た。

6. 本書では、写真・実測図に共通する遺物番号を付け、本文でもこの番号を用いた。

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 周辺の遺跡	3
第3章 調査の概要	7
第1地点	7
第2地点	12
第4章 遺物	23
第5章 まとめ	32

捕 図

第1図	泉大津市地形図
第2図	調査地点
第3図	第1地点遺構図
第4図	井戸1
第5図	井戸1出土状態
第6図	井戸1出土土器
第7図	井戸1出土土器
第8図	第2地点遺構図
第9図	井戸1
第10図	井戸1出土状態
第11図	井戸1出土土器
第12図	井戸1出土土器
第13図	井戸1出土土器
第14図	井戸1出土土器
第15図	井戸1出土土器
第16図	土鍋
第17図	井戸2

図 版

- | | | |
|------|-------|---------------|
| 1 | | 第1地点 遺構全景・井戸1 |
| 2 | | 第1地点 井戸1 |
| 3 | | 第2地点 遺構全景・井戸 |
| 4 | | 第2地点 井戸 |
| 5～6 | | 第1地点 遺物 |
| 7～13 | | 第2地点 遺物 |



第1図 泉大津市地形図

「この地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1の地形図を使用したものである。」

第1章 遺跡の位置と環境

大阪府泉大津市は大阪平野の南部に位置し、西側は大阪湾、北側は高石市、東側は和泉市、南側は泉北郡忠岡町と隣接した面積11,024km²、人口69,895人の規模の都市である。市内西部を海岸線に沿って、大阪臨海線と国道26号線および私鉄南海電鉄本線が平行して走り、大阪と和歌山を結ぶ動脈となっている。市街地はこの道路と鉄道に沿い、住宅と商工業用建物で形成されており、地場産業として織物工業が盛んで特に毛布の生産高は全国の95%を占めている。東部は農業用地が存在しており条里制の施された跡が整然と残され、古くより連絡と農業を基盤としていたことが窺われる。しかし現在では、第2阪和国道の一部開通と土地区画整理事業の実施により、宅地開発の波が押し寄せ市街地化が進行している。昭和45年に開催された日本万国博覧会を契機として大阪府南部の地域において開発のテンポが急速に進められ、商業都市大阪のベッドタウンとして住宅建設に著しいものが見られる。また大阪と和歌山を結ぶ国道26号線の交通量は、近年の経済発展にともない限界に達しまし状態であったため、建設省はその緩和を図り、今後の増大を見

込んで、万国博関連事業として第2阪和国道を計画した。この国道の建設工事は全線完了には至っていないが一部開通によって、沿線の各市において早期開通が望まれている。

第2阪和国道およびそれに伴う土地地区画整理事業に先立つ試掘調査で、埋蔵文化財包蔵地の拡大^{注①}、あるいは新発見があいつぎ、発掘調査が実施される結果となった。泉大津市豊中地区においては、大阪府教育委員会が昭和48年～49年に国道敷内を発掘調査した結果、古墳時代から中世にわたる集落跡の存在が判明し、豊中遺跡の発見となった。その後、豊中古池遺跡調査会による土地地区画整理事業地区内の調査により、その範囲は国鉄阪和線和泉府中駅より北へ約900m、南海電鉄本線泉大津駅より東南東の方向へ約1,800mの地点を中心として、南北約1,000m、東西約800mの規模を呈していることが判明した。

豊中遺跡を地理的に見てみよう。大阪湾東岸が東西に走り、背後は、葛城山を主峯とする和泉山脈が海岸線に平行して走る。そこから北へ向かって数条の丘陵が伸びており、信太山丘陵もその一つで、この丘陵から更に北西に向かって低位段丘が張り出し、海拔11～15mの段丘上で、海岸線より約2.5km離れた地点に今回報告の豊中遺跡が存在する。ここには他に弥生時代より連續^{注②}として人々の生活が営まってきたことを示す遺跡が多数存在する。和泉地方の地形図を眺めると多数の溜池が存在することに気がつく。しかし現在では大多数が埋め立てられており、今後の農業の運命を示唆している。池の大半はわずかな谷部分に大きく堤防を築いて造られており、水田開発に伴い増加したことを物語っている。この地方は「イズミ」と呼ばれるとおり、湧水の豊富地域であった。そして、瀬戸内式気候に属し、降雨量も比較的少なく大きな河川も存在しないため、農業用溜池が数多く築造されたものと思われる。

第2章 周辺の遺跡

和泉地方の平野部における気候は、温暖で降雨量も概して少なく瀬戸内式気候に属している。そのため、生活の場・生産の場として早くから開けていたことは明らかである。近年の開発により、水田地帯において従来よりわずかに知られていた遺跡はその範囲がより大きく周知され、新たに発見された遺跡もあって各所で発掘調査が実施され、微々たるものではあるが遺跡の性格を把握するのに供している。以下豊中遺跡昭和53年度発掘調査結果報告をするにあたり、周辺の遺跡の大略を時代順に紹介してみる。

旧石器時代

昭和24年、群馬県桐生市岩宿において、洪積層内より旧石器が発見された。それまで日本には旧石器文化は存在しないと考えられていたのであるが、その後、各地においてこの文化に属する遺物が続々と発見され、石器製作技法や形態によって石器文化の差異を明らかにされつつある。日本における旧石器時代は、約10万年前から1万2000年前までの間に洪積世に属する。この時代の人々は、狩猟採集により一定の領域を移動していたようで、住居跡も少なからず発見されている。

泉大津市内においては、現在のところこの時代の遺物は発見されていない。昭和40年、大阪府立泉大津高等学校地盤部が、和泉市父鬼町の海拔390mの地点で発掘調査を実施した。その調査でサヌカイトの石核および剝片が発見され、人床遺跡と名付けられた。^{出③}高石市大園遺跡からは後期旧石器時代ナイフ形石器の他、旧石器時代終末期から縄文時代草創期・早期に見られる有舌尖頭器が1点出土している。^{出④}和泉市伯太北遺跡からも有舌尖頭器とナイフ形石器が出土し、他に堺市野々井遺跡、岸和田市西山遺跡、琴山遺跡、葛城山頂遺跡、海岸寺山遺跡等でも、旧石器時代に属すると思われる石器や剝片が出土しており、今後資料の増加することも予想される。

縄文時代

日本における最初の土器文化であり、約1万2000年前から2300年前位の期間を有する。全国的にこの時代の遺跡は発見されているが、特に中部山岳地帯、関東、東北地方に数多く見られ、文化の発展過程を知ることができる。植物の採集から栽培への移行により、生活の安定に伴う人口の増加や居住地の定着に対応して、土器の器種が用途に応じて増え、装飾も加えられるようになった。近畿地方においてもその遺跡は発見されているが非常に少ない。自然環境や立地条件に大

きく左右されたのであろう。泉大津市では、この時代の明確な遺構は今のところ発見されていないが、土器片は検出されている。豊中遺跡内に存在した古池・上池は、河川を堰止めて造られた池であるため、その底には砂利層が見られた。この河川のベースを形成していた砂利層中より縄文時代中期末に属する土器片が出土した。また同遺跡の他の位置の砂利層からも数片が発見されている。いづれも上流部より移動してきたものであるらしく磨耗しており、このことから付近でこの時代の遺跡の存在が予想される。板原遺跡からも中期末に属する土器片が、炭・灰・焼土を伴って発見された。定住地かキャンプサイトの跡かは今後の調査によらなければならない。泉大津市の周辺部を見ると、岸和田市葛城山頂で中期・糞土路遺跡から中期初頭、春木八幡山遺跡から後期の土器が発見されており、和泉市信太山丘陵では前期打製石甌、府中遺跡から石棒・石鐵、伯太北遺跡からは中期から後期の土器、池上・曾根遺跡からは晚期の土器、堺市四ツ池遺跡からは後期・晚期の土器がそれぞれ出土している。このように和泉地方において丘陵部や台地上・砂丘などから遺物は発見されているが、遺存状態は良好でなく、明確な遺構も検出されていないため、この地方の縄文時代は未だ充分に把握されていないが、次の弥生文化開始の下地は既に出来ていたと考えられる。

弥生時代

紀元前2・3世紀頃、北九州に始まる稻作と金属器使用に代表される弥生文化は、急速に東進し近畿地方に伝播された。堺市四ツ池遺跡では、縄文時代晩期の土器に粗痕の付いているのが発見されており、和泉における最初の米つくりと考えられ、弥生文化との接点を求めることができる。泉大津市池浦遺跡は、弥生時代前期中段階に出現した集落で、低位段丘に位置し、人工のV字溝が掘られ、住居区を限定していたようである。池浦遺跡より東方約1kmの地点に池上・曾根遺跡が存在し、前期新段階の上器が中段階の土器を若下含んで出土する。そして後期まで集落は発展しながら継続していく様子が現在までの調査によって明らかにされている。特に前期から中期にかけて掘られた人工の溝は集落を開み、規模の拡大とともに掘り直されていることは注目に値し、日本でも有数の弥生時代集落であると言える。中期に始まる遺跡として、高石市大園遺跡、和泉市府中遺跡・和気遺跡、泉大津市虫取遺跡などがあげられる。後期になると丘陵上にも集落が作られるようになる。これは高地性集落と呼ばれ、瀬戸内から近畿地方にかけて広く見られる。その立地条件から、防御的色彩の濃い集落と考えられ、和泉市觀音寺山遺跡、惣ノ池遺跡¹¹⁽⁵⁾などがある。泉大津市古池遺跡内要池からは、大阪府教育委員会の調査によって有鉤銅鏡が1個出土していることを付け加わえておく。

古墳時代

高塚墳墓に代表されるこの時代は、4世紀から7世紀までの期間で、巨大な首長墓の造営はその背景に地域的政治集団の形成を物語り、古代国家への様相を呈してゆく時期である。そして古墳を中心に前期・中期・後期に分けられ、前期古墳として景初3年の銘のある鏡を出土した和泉市上代の黄金塚古墳・丸笠古墳・岸和田市摩湯山古墳・久米田古墳群などがあげられる。中期には、堺市の百舌鳥古墳群・和泉市貝吹山古墳等、巨大な墳墓が目につく。後期は、高石市富木車塚や堺市陶器千塚・和泉市倍太山千塚などがある。この時代になって墓域と集落・生産地が大きく隔てられるようになった。従来は埋葬施設すなわち古墳に調査研究の大半が占められていた。しかし最近の大規模な開発により、平野部に位置する集落跡も必然的に調査が進められ目立った成果をあげている。泉大津市には現在のところ古墳は見あたらないが、昭和29年発行の地形図(25,000分の1)には、塚らしいものが見られ、その時点までは存在した可能性がある。集落跡として豊中遺跡・古池遺跡・七ノ坪遺跡・東雲遺跡の他、遺物散布地として、板原遺跡・虫取遺跡などがあげられる。豊中遺跡は、弥生時代から古墳時代への過渡期に出現した集落で、住居群が数ヶ所で確認されている。古池遺跡では、倉庫跡と古代の道が知られている。七ノ坪遺跡は、集落跡とともに弥生時代の墳墓形態の一つである方形周溝墓や土壙墓が古墳時代にはいっても造られていていることを明らかにした。この遺跡は堅穴住居で構成される集落であり、掘立柱建物は確認されていない。繩文・弥生時代の系譜を引く堅穴住居の集団は、墓制においても弥生時代からの方形周溝墓や土壙墓を古墳時代にはいってなお踏襲し、高塚墳墓を築いた集団とは異なると思われる。^{注③} 大阪府池田市宮の前遺跡においても、古墳時代堅穴住居址5軒と方形周溝遺構3基、土壙墓が発見されており、七ノ坪遺跡と同様の性格が与えられよう。東雲遺跡は海岸部に近い遺跡で堅穴住居址2軒、井戸1基が発見されており、5世紀頃の集落跡である。

奈良・平安時代

東雲遺跡でこの時期に相当する掘立柱建築跡が10数棟検出されており、小津の港と和泉国府を結ぶ街道沿いに営まれた集落であろうと思われる。豊中遺跡では、遺構は確認されていないが土器片が発見されている。豊中遺跡の南に接して、和泉国の中心である和泉国府跡、西に接して白鳳元年創建の穴師神社や宝龟年中に創建されたという穴師薬師寺跡が存在し、これらを中心にして集落が形成されていたにちがいない。寺院建築につきものの瓦が多数出土している。穴師薬師寺跡付近、豊中遺跡などからは平安時代末以降の瓦が発見されている。豊中遺跡内では「大福寺」

の字名が残っており、この頃に寺院が建立されたと考えられるが記録は何も残されていない。

中世

中世遺物として、瓦器片・磁器片・瓦片・土器片・小皿片などが豊中遺跡・古池遺跡・穴田遺跡・穴師神社遺跡・板原遺跡・虫取遺跡等から出土している。明確な建築物跡は未だ確認されていないが、種々の形態の井戸が発見されており、今後の調査によって、より明らかにされるであろう。古池遺跡では、鎌倉時代の倉庫跡が発見されている。

第3章 調査の概要

本年度は、2箇所を対象に発掘調査を実施した。第1地点・第2地点（第2図）として、地点別に報告する。



第2図 調査地点

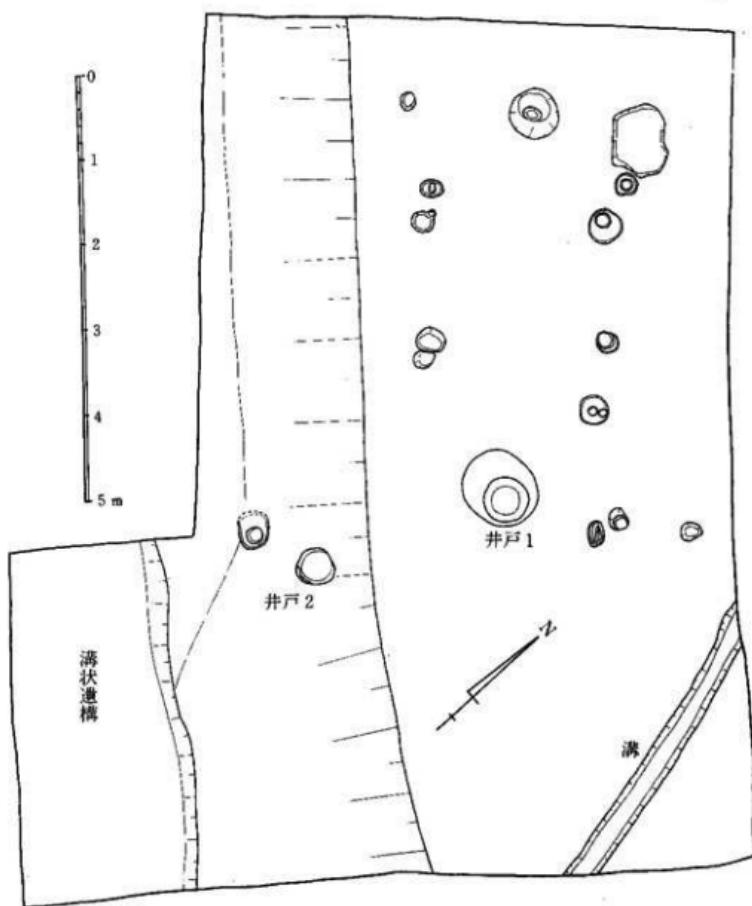
第1地点 泉大津市豊中445-1, 446, 450（第3図）

昭和51年度に試掘調査を実施した結果、中世に属する造構および遺物が発見されたため、今回の調査となった。昭和52年度調査報告の第5地点の付近にあたる。

調査範囲は、 $6.5m \times 10m$ 、 $2m \times 4m$ のL字形で $73m^2$ である。既に盛土がなされていたため、重機による盛土除去を実施し、その後人力によって掘削を行った。

層序は、盛土(50cm) 耕土(15cm) 床土(10cm) 灰茶色土(5cm) 黄色粘質土(地山)の順であり、灰茶色土には中・近世の遺物が含まれていた。

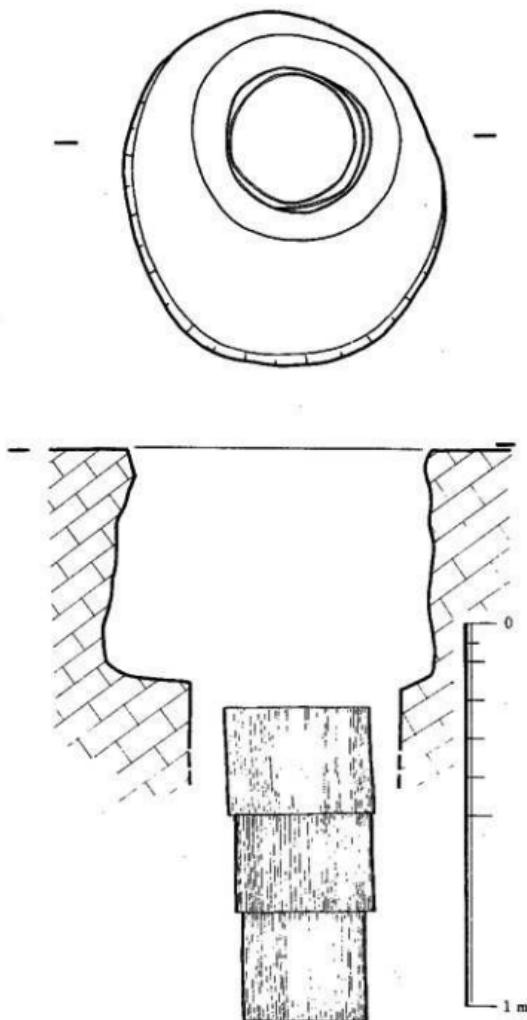
造構は、黄色粘質土(地山)面に認められたが、後世に削平されたようである。検出された遺



第3図 第1地点遺構図

構は、井戸、溝、溝状遺構、若干のピットなどで、全て中世に属するものである。

井戸 1 (第4図) 掘り方の上面形状は、やや楕円形を呈しており、長径93cm、短径80cmを測る。内部はわずかに袋状となり、深さ60cmでテラス状の段を有し、その中央部やや東寄りに、直徑55cmの掘り方を持ち、曲物を三段積み重ねた井戸枠が遺存していた。上段の曲物は、直徑38cm、高さ28cm、中段は直徑36cm、高さ28cm、下段は直徑32cm、高さ30cmの規模である。堆積土は、



第4図 井戸 1



第5図 井戸1土器出土状態

上部の楕円形掘り方内で、黄褐色砂質土と灰茶色土の二層に分けられ、曲物内は灰色粘土が底部まで認められた。そして底部には浄水のための細砂が敷きつめられていた。

遺物は、楕円形掘り方の中位よりまとまって出土し(第5図)、瓦器碗(1~8)・瓦質小皿(9~13)・土師質小皿などで、また曲物内下部からは、土釜片・土師質小皿片などが検出された。

井戸2 溝状遺構の北側斜面に位置する。

規模は直径44cm、深さ28cmを測る比較的小規

模のものであるが、曲物の井戸枠が一段遺存していた。しかし上部が削平された可能性も考えられるので、この規模が全てであるとは言いがたい。井戸内堆積土は、灰色砂質土である。底部には、井戸1で認められたのと同様に浄水のための細砂が若干敷きつめられていた。

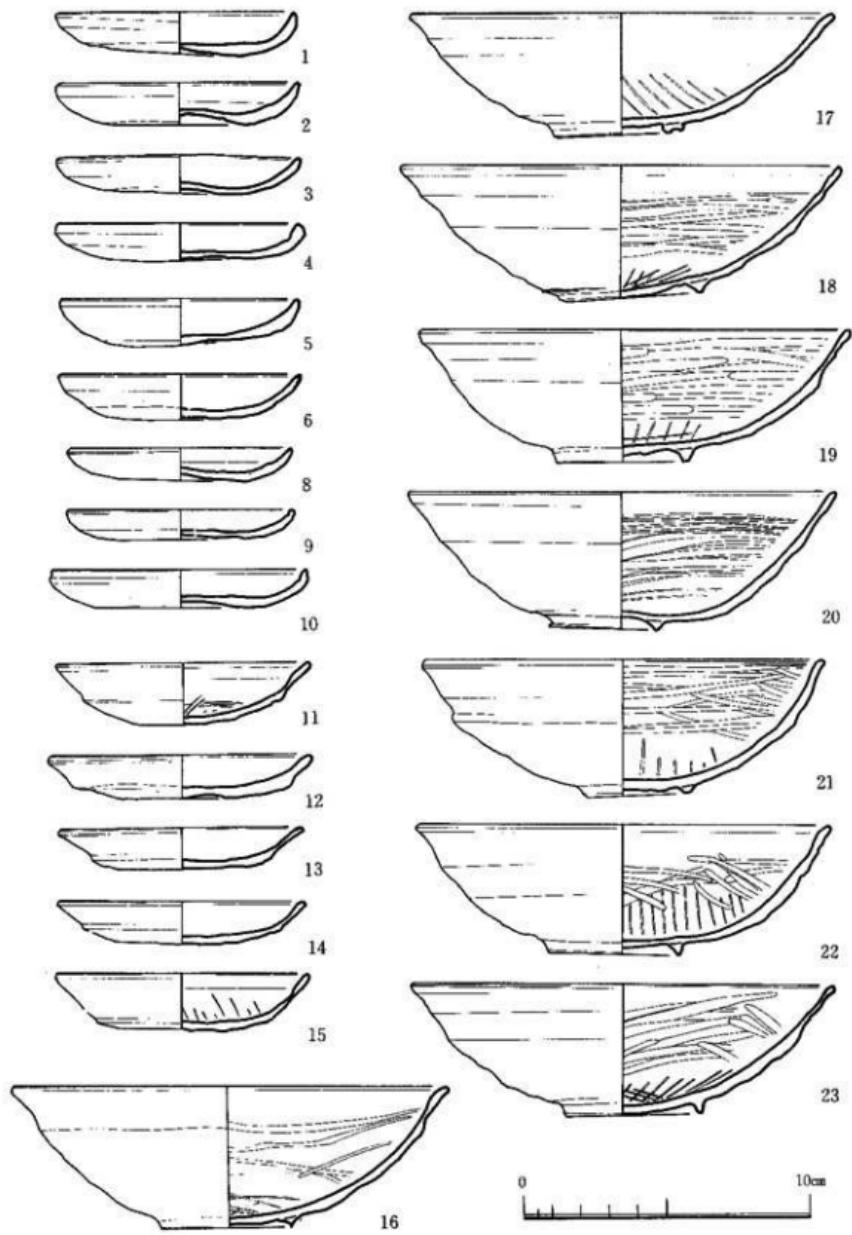
出土遺物は、井戸枠の外側に須恵器片を検出したのみである。

溝 調査地区の東隅に位置し、流路は南北方向である。規模は、幅30cm、深さ15cmを測り、直交断面は、上端のやや広がったU字形を呈している。溝内堆積土砂は、灰色細砂である。

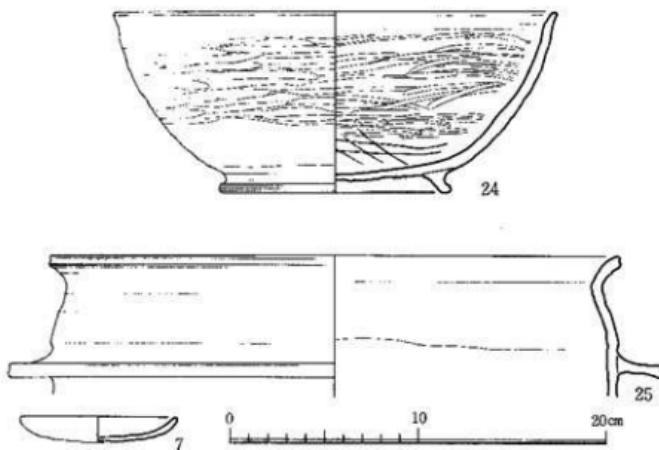
溝状遺構 調査区域の $\frac{1}{3}$ を占める遺構で、南西方向へゆるやかな斜面を形成している。調査範囲を越えるため、その規模は不明である。調査時に確認できた比高差は35cmで、部分的に検出した底面は、平坦であった。堆積土砂は、全体に灰茶色砂質土が見られたが、斜面下部から平坦な底部にかけて砂礫層が薄く広がっていた。

遺物は、瓦器片・瓦片が少量出土した。

ピット群 主に井戸1の西に散在する直径10cm~50cm、深さ10cm~40cmを測るものである。一定の間隔を持って一列に並ぶピットも存在するが、建物を復元することは不可能である。ピットの大きさは、直径10cm~25cm、深さ10cm~25cmと、直径50cm、深さ40cmを測るものに大別される。前者は内部に何も存在しなかったが、後者は摺鉢形を呈し、底部には平たい河原石が置かれていた。そして瓦器片・土師質小皿片・白陶片(図版第5イ・ロ)などが出土した。用途は不明である。検出した全てのピットの堆積土は、灰色砂質土である。



第6図 井戸1出土土器



第7図 井戸1出土土器

第2地点 泉大津市豊中339（第8図）

住宅建設に先立つ発掘調査である。本調査地は、昭和49年度に実施した豊中土地区画整理事業地区内T.O.B・B地区で道路第23号発掘調査部分の東側に隣接する地点である。当時の調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡及び河川状遺構が検出され、それらの遺構とともに多くの遺物も多数出土している。また昭和52年度調査報告の第2地点の付近でもあり、本地点においても遺構の存在が予想されたため今回の調査となった。調査範囲は25m×12.5mの312.5m²である。

調査は、重機によって耕土・底土を除去し、その後人力による掘削を実施した。遺構面は、土地区画整理事業時及びそれ以前の整地により、若干削平を受けた部分も見られた。遺構は古墳時代前期・平安時代後半・中世の三時期に分けられるが、全て同一面から検出された。以下遺構説明を時代別に分けて記述する。

古墳時代（前期）

明確な遺構は確認できなかったが、昭和49年度の道路第23号部分発掘調査で発見された河川状遺構の下流部左岸と思われる部分を検出した。しかし後世の遺構と重複するため、部分的にトレシチを掘削し、その規模を確認しようとしたが、堆積土砂は、暗茶色土と礫の混じったものが上面より見られ、その30cm下では灰色砂礫となっており、掘削不可能となり不明のままで終った。

出土遺物は、先の調査における河川状遺構で発見されたものと同時期で、胴部に叩き目を施し

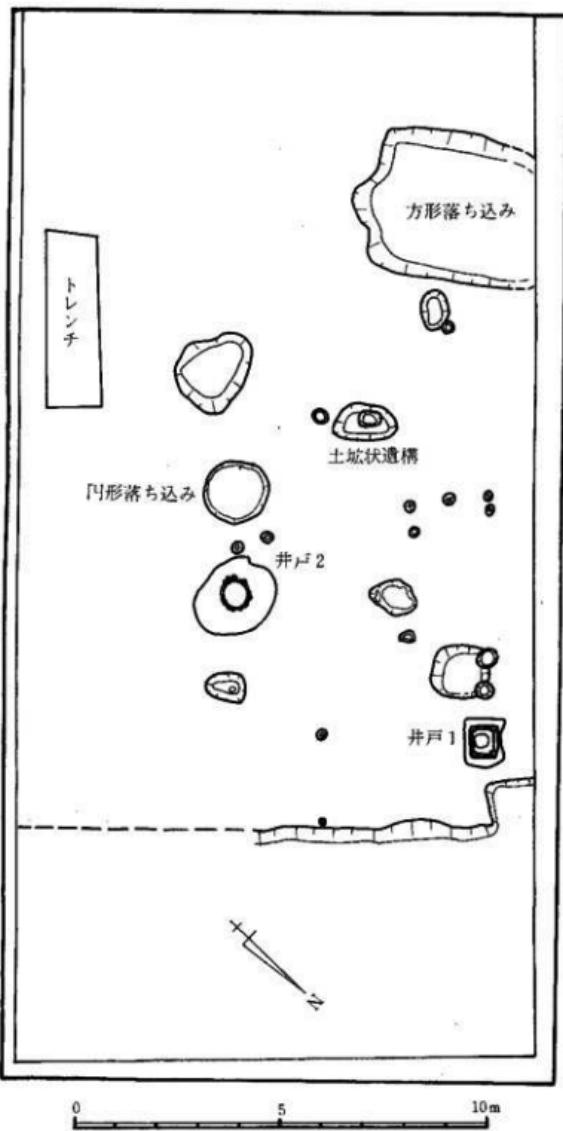
た甕、河内系の甕（上田町Ⅱ式）など破片のみであった。

平安時代（後半）

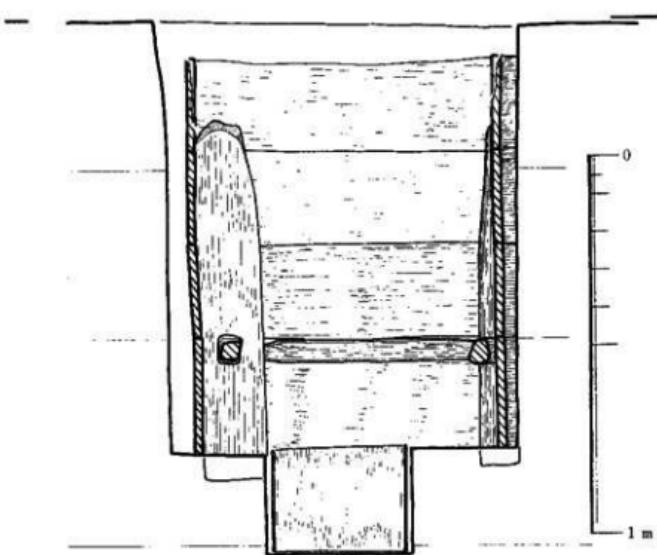
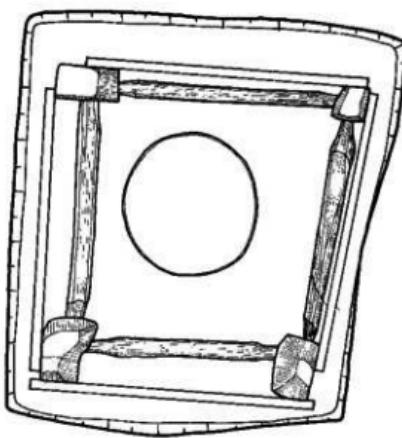
この時期に属する遺構は井戸のみであった。上部形状は方形で、井戸枠は柱と側板、下部は曲物を使用した井戸である。

井戸1（第9図）

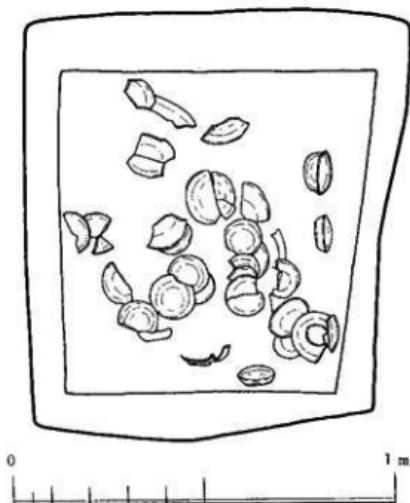
掘り方は $1\text{m} \times 1\text{m}$ 、深さ1.45mの規模である。井戸枠構造は四隅に柱状の角材（ $10\text{cm} \times 15\text{cm}$ 、現存長1m）を立て、隣りあう二面に柄穴を設け、両端を削りやや細くした棟（ $5\text{cm} \times 5\text{cm}$ 、長さ72cm）を横木としてその柄穴に差し込んでいた。側板は、幅30cm、長さ75cm、厚さ3cmの板を横位置にして、1辺に4枚（現存）を積み上げていた。その底部中央に更に、曲物の井戸枠（直径30cm、高さ27cm）が据えつけられていた。堆積土砂は、上部で暗茶色土、下部で暗灰褐色土に分けられる。底部は全体に浄水のための



第8図 第2地点遺構図



第9図 井戸1



第10図 井戸1土器出土状態

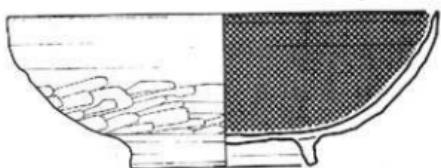
砂が敷きつめられていた。(曲物内底部にも同様のことが施されていた。)

出土遺物は、黒色土器(26~47)・土師器杯などが上部で多量に発見されたが、中には灰釉陶器2点(103・104)と土鍋(105)と思われる破片も混じっていた。黒色土器・土師器杯は大半が入念に製作された完型品で、特に黒色土器の高台部内側あるいは体部外面に「田井」「田井殿」と墨書きされたもの(26~31)、高台の内側を黒く塗ったものなどが見られた。

本井戸は、調査終了時に井戸枠を取り上げたが、側板は、柱状の角材にかろうじて支えられている程度の長さであり、その裏側は、礫の混じった粘土で裏込めを施されていることが判明した。この側板は全部で16枚使用されているが、そのうち2枚は、両端が円形に切断されており、他の目的で製作されたものを、二次使用として転用されたものと思われる。

中世

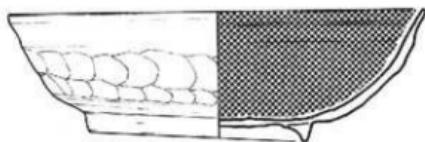
検出した遺構の中で、この時期のものが最も多く占める。それは、井戸・円形落ち込み・方形落ち込み・土壙状遺構・ピットなどである。



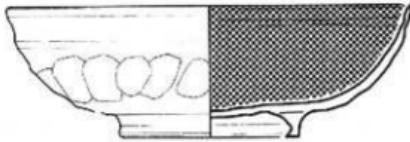
26



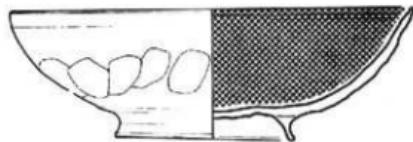
29



27



30

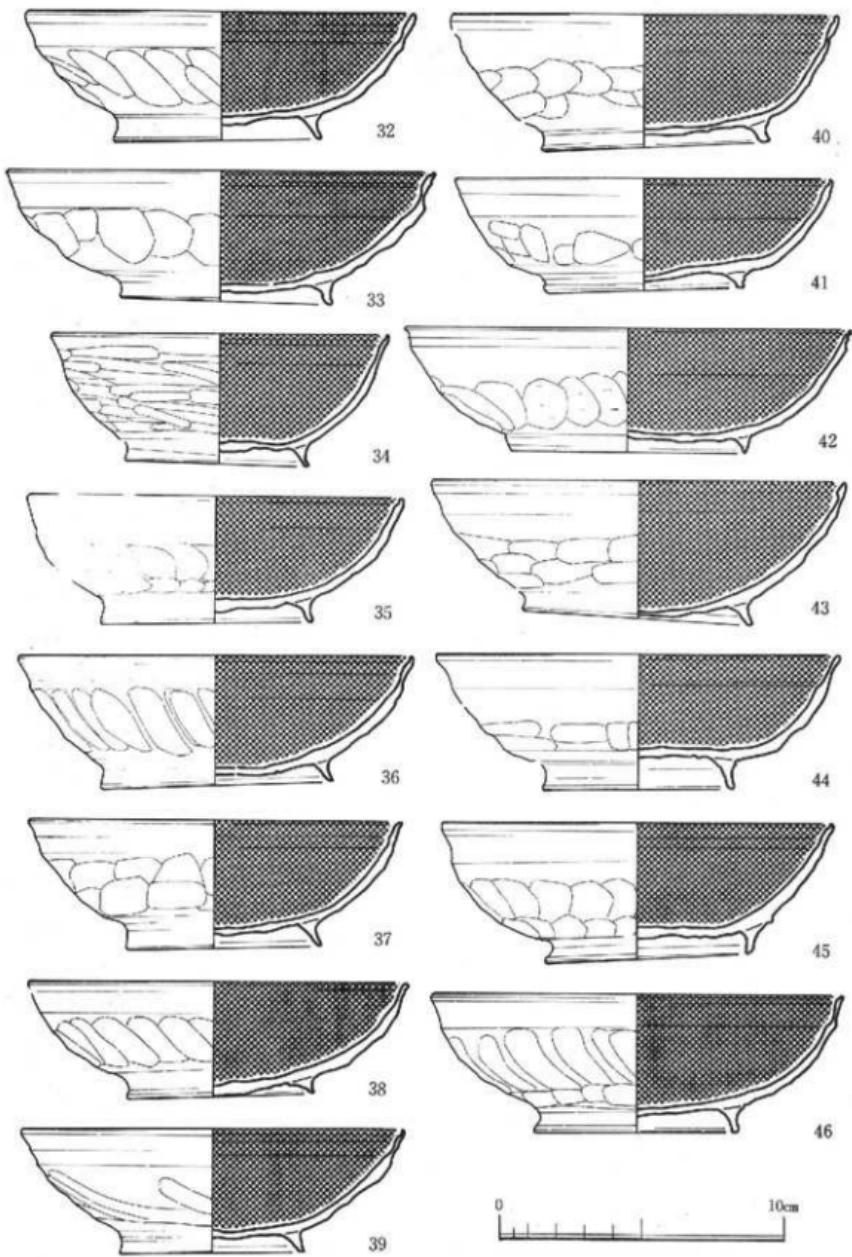


28

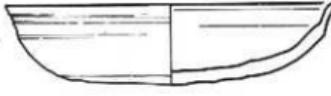
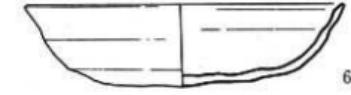
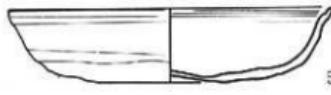
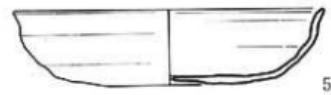
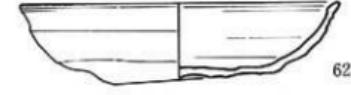
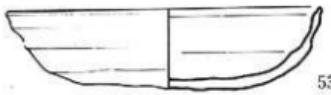
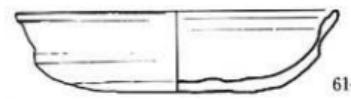
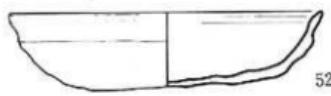
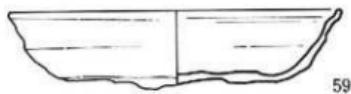
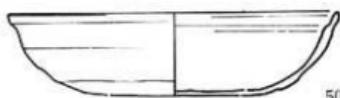
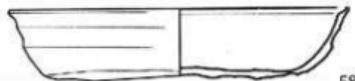
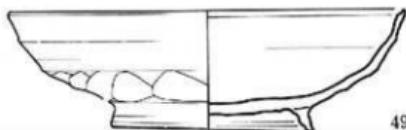
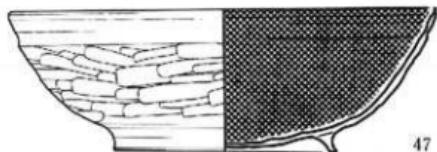


31

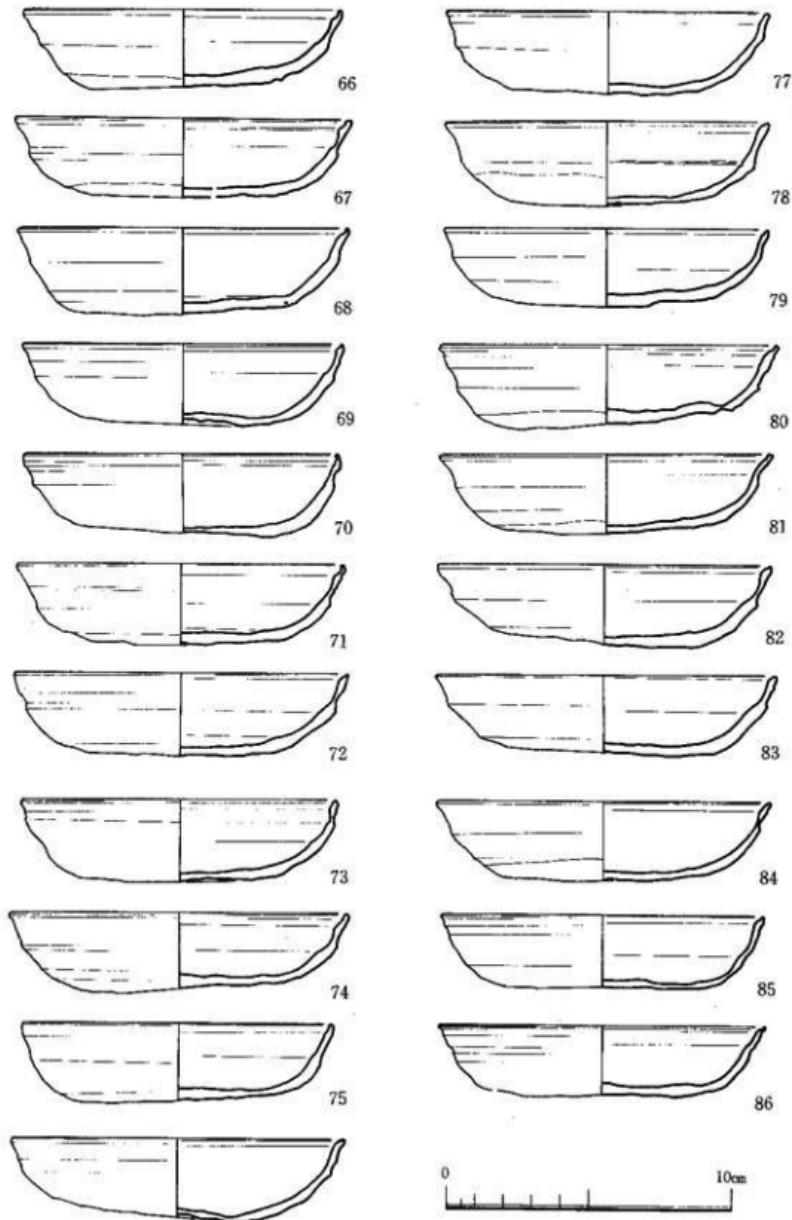
第11図 井戸1出土土器



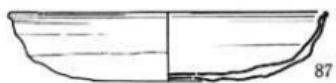
第12図 井戸1出土土器



第13図 井戸1出土土器



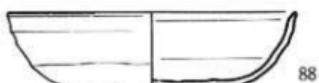
第14図 井戸1出土土器



87



95



88



96



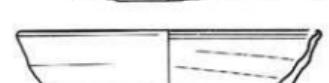
89



97



90



98



91



99



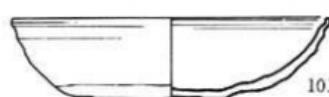
92



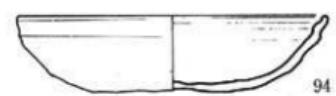
100



93



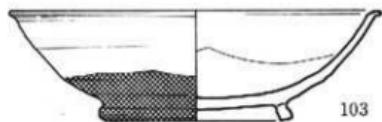
101



94



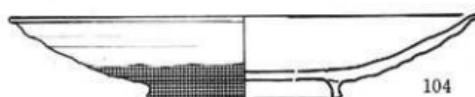
102



103



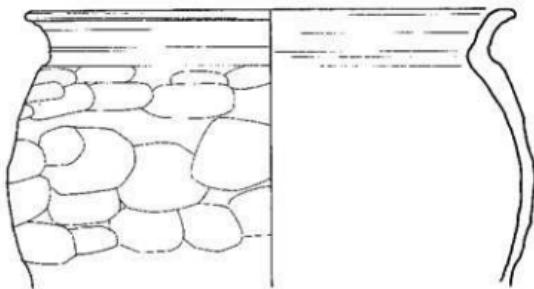
106



104



第15図 井戸1出土土器



105

第16図 土鍋

井戸2 (第17図) 円形の井戸である。掘り方は直径1.25m、深さ1.9m以上で、井戸棒は20cm大の河原石を積み重ねているが、その中に1点だけ連珠文の軒平瓦が含まれていた。井戸内径は60cmで、底部になる程狭くなっている。井戸棒を形造っている積石は完存していると思われたが、上部のみで、深さ1.8m以上においては石が内部に落ち込んでいた。安全面からこれ以上掘らなかったため、実際の深さは不明である。堆積土は上部より、灰茶色砂質土、灰色粘土、暗灰色粘土となっていた。

出土遺物は、平瓦片・土師質小皿片・瓦器片・土茶片など少量かつ細片であった。

円形落ち込み 造構検出過程で、その規模・形状から井戸と思われたが、掘削後の数値は、直徑1.5m、深さ50cmとなり、井戸とは言いがたいようである。しかし井戸2が隣接して存在するので、この造構も井戸として掘り始められたのではないかと推測できる。堆積土は、灰色砂質土に暗茶色粘土がブロックとして混じっていた。

出土遺物としては、瓦器の細片を少量検出したのみである。

方形落ち込み 縦4.5m、横3.5m(推定)、深さ35cmを測り隅丸の形を呈する。底部へは、傾斜を持って至る。堆積土は、灰茶色砂質土であった。用途不明。

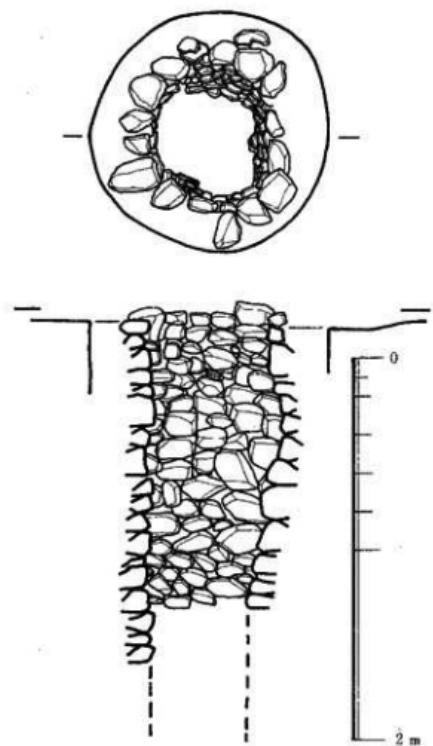
出土遺物としては、瓦器が少量検出されたのみである。

土壤状造構 楕円形を呈するもので縦幅1.5m、横幅90cm、深さ20cmを測る。底部へは、ゆるい傾斜を持ち、堆積土は、灰色と灰茶色の砂質土であった。用途は不明である。

出土遺物としては、少量の瓦器片だけである。

ピット 直径10cm~25cm、深さ10cm~30cmを測る。造構内堆積土は、灰色砂質土か灰茶色砂質土であった。それぞれピット間相互の関連については不明である。

出土遺物としては、瓦器片・土師質小皿片が少量検出したのみである。



第17図 井戸 2

第4章 遺物

土師質小皿

No.	法量		形態及び調整	胎土及び色調
	器高	口径		
1	2.1cm	8.5cm	平たい底部より、斜め上方に立ち上がる口縁をもつ。調整はヨコナダが主であるが、外側底部は指圧痕が残る。また底部は、やや内側にふくらむ。	胎土一精製された粘土を使用 色調一茶灰色
2	1.5cm	8.7cm	[同] 上	胎土一精良な粘土を使用するが 中に少少の砂粒が混る 色調一茶灰色
3	9.4cm	8.7cm	[同] 上	同上
4	1.4cm	8.8cm	平たい底部より、斜め上方に広がる口縁をもつが、その端面は凹くなっている。調整はヨコナダが主であるが、底部外面は指圧痕が残る。	同上
5	1.7cm	8.6cm	[同] 上	同上
6	1.6cm	復元 8.6cm	[同] 上	同上
7	1.4cm	復元 8.5cm	[同] 上	同上
8	1.3cm	復元 8 cm	内側にへこむ底部より、斜め上方に広がる口縁を持つ。調整はヨコナダが主であるが、底部近くで指圧痕が残る。	同上
9	1.15cm	復元 8.1cm	[同] 上	同上
10	1.4cm	復元 9.2cm	内側にへこむ底部より斜め上方に広がる口縁を持つ。その端部外面に凹を持つ。	同上

瓦質小皿

No.	法量		形態及び調整	胎土及び色調
	器高	口径		
11	2.2cm	9.1cm	やや平たい底部より、斜め上方に広がる口縁を持つが、口縁のやや下での字に曲がる。調整はヨコナダが主であるが、外側の口縁下に指圧痕が残る。内側底部近くには、横並び文が残り部分的に格子目になる。	胎土一精良な粘土を使用 色調一暗灰色
12	1.6cm	9.5cm	やや平たい底部より、斜め上方に広がる口縁を持つが、口縁のやや下での字に曲がる。調整はヨコナダが主であるが、外側の口縁下に指圧痕が残る。内側底部近くには、横並び文が残り部分的に格子目になる。内側底部の暗文は無い。	胎土一精良な粘土 色調一暗灰色

No.	法 番		形 態 及 び 調 整	胎 土 及 び 色 調
	器 高	口 径		
13	1.5cm	4.8cm	やや平たい底部より、斜め上方に広がる口縁を持つが、口縁のやや下の字に曲がる。調整はヨコナダが主であるが、外側の口縁下に指圧痕が残る。内面底部近くには、横窓暗文が残り部分的に格子目になる。内面底部の暗文は無い。	胎土一精良な粘土 色調一暗灰色
14	1.6cm	8.9cm	やや平たい底部より、斜め上方に広がる口縁を持つが、口縁のやや下の字に曲がる。調整はヨコナダが主であるが、外側の口縁下に指圧痕が残る。内面底部近くには、横窓暗文が残り部分的に格子目になる。	同 上
15	2.1cm	復元 9.1cm	やや平たい底部より、斜め上方に広がる口縁を持つが、口縁のやや下の字に曲がる。調整はヨコナダが主であるが、外側の口縁下に指圧痕が残る。内面底部近くには、横窓暗文が残り部分的に格子目になる。底部内面に、斜め方向の暗文が巾5mm間隔で施されている。	同 上

瓦器焼

No.	法 番			形 態 及 び 調 整	胎 土 及 び 色 調
	器 高	口 径	高 台		
16	5.1cm	11.5cm	高 0.4cm 径 4.8cm	半球状を示す体部は、口縁近くでやや斜め上方に広がりを示し、その外側は指圧により、やや凹む。内面の調整は、横方向の差研磨が粗雑に行ない、底部は斜格子状の暗文を施す。外側は、LII線はヨコナダ、それ以下高台近くまでは、指圧痕が見られる。高台は、粘土ヒモを輪にして貼り付けている。	胎土一精良な粘土を使用 色調一暗灰色
17	4.5cm	15cm	高 3 mm 径 4.7cm	やや半球状を示す体部は、口縁近くで、やや斜め横に広がる。端部外側は指圧によりやや内側に凹む。調整は内面に横窓暗文が見られ、底邊に立っては、例状の暗文が施されている。外側には、ヨコナダが1段階部近くに見られ、指圧痕が高台近くまで残っている。高台は、粘土ヒモを輪にして貼り付けている。	胎土一精良な粘土を使用 色調一暗灰色
18	4.8cm	15.6cm	高 4 mm 径 5.2cm	やや半球状に近い体部を持つ。口縁端部は丸くなっている調整は、内面に横方向の差研磨が見られ、底部に斜格子の暗文が認められる。外側は、ヨコナダ、口縁近くに見られ体部全体は指圧痕が残る。高台は粘土ヒモを輪にして貼り付けている。	胎土一精良な粘土を使用するが 中に少量の砂粒が混入 色調一暗灰色
19	4.9cm	14.3cm	高 4.5mm 径 5 cm	形態、調整は18と同じである。しかし底部の暗文は無い。内面底部近くに、円形の高台痕が残るが、これは製作時に重ねたためいたものと思われる。また、外側体部に、半円形に白くなっているが、重ね焼きの歴史したものである。	胎土一精良な粘土を使用 色調一暗灰色
20	5 cm	15.3cm	高 3 mm 径 4.1cm	形態、調整は18と同じである。外側には重ね焼き痕は無い。また底部内面の暗文も無い。	同 上
21	4.9cm	12.3cm	高 2 mm 径 4 cm	形態、調整は18と同じである。底部は横方向の暗文が巾8 mmの間隔で施されている。	同 上
22	4.75cm	12.7cm	高 4 mm 径 5 cm	同 上	同 上
23	4.9cm	15cm	高 4 mm 径 5 cm	形態、調整とも18と同じである。底部には斜格子状の暗文を持つ。また外側には重ね焼きと思われる跡が白く、半丸状に残る。	同 上

瓦質大型鉢・羽釜

No.	法 量	形態及び調整			胎土及び色調
	器高	口径	高台		
24	9.7cm	復元 23.8cm	高 1.2cm 径 12.3cm	半球状の体部を持つ。その口縁はやや斜め横に広がる。高台はしっかりとしたもので、体部から丸の字形に広がり、端部近くで横に開く。調整は、内面で横溝網彫が見られ、底部には網格子状の線文が入れられている。外面は、口縁部から体部中位あたりまで指圧痕の上に横溝網彫がされている。高台は、ヨコナダされている。また外面には、重ね焼き痕と思われる跡が半丸状に残くなっている。	胎土一精良な粘土を使用するが中に少量の砂粒が含まれる。 色調一暗灰色
25	不明	復元 30.7cm	-	やや直立する口縁部に、くの字形に外反する口縁部をもつつばは、やや下向きになっている。口縁部内側は、ヨコナダ調整されている。外面は、つば及びつばより上方は、ヨコナダされている。つばより下は、スカフ附着しており調整は不明である。	同上

黒色土器

No.	法 量	形態及び調整			胎土及び色調	備 考
	器高	口径	高台			
26	5.5cm	15.4cm	径 6.7cm 高 9mm	丸身を持つ軽部と、軽部より下方へ張り出す高台からなる。杯部は、やや平たい底から丸くカーブを描き上方へのびる。口縁部内側に一条の凹がまわりその下は、ヨコナダによる深い凹ができる。外面端部はヨコナダ。中段より高台近くまでは、施削(右→左)がなされている。高台は杯部に貼り付けてヨコナダを施している。	胎土一精良な粘土を使用するが中に少量の砂粒が混る。 色調一灰茶色	群内面に炭素を吸着さす。(内黒)。高台内に墨書きがされている。田井?
27	4.65cm	14.8cm	径 7.8cm 高 6mm	形態、調整とも26と同じであるが、外側の施削は26の様に細かくなく、やや大きい施削である(右→左)。端面は丸く見はれない。	胎土一精良な粘土を使用するが中に少量の砂粒が混る。 色調一灰茶色	群内面に炭素を吸着さす。(内黒)。高台内に墨書きがされている。田井?の3文字
28	4.7cm	14.4cm	径 6.4cm 高 8mm	形態、調整とも26と同じであるが、26の様に外側の施削は細かくなく、やや大きい施削である(右→左)。口縁部内側には、凹がまわる。	胎土一精良な粘土を使用する 色調一灰茶色	内面に炭素を吸着さす。(内黒)。高台内に墨書きがされている。田井?
29	4.7cm	14.4cm	径 6.5cm 高 7mm	同上	胎土一精良な粘土を使用するが中に少量の砂粒が含まれる。 色調一灰茶色	内面に炭素を吸着さす。(内黒)。高台内に田井?との墨書きがある。
30	4.7cm	13.6cm	径 6.2cm 高 7mm	同上	胎土一精良な粘土を使用するが中に少量の砂粒が含まれる。 色調一灰茶色	内面に炭素を吸着さす。(内黒)。高台内に田井?との墨書きがある。
31	4.4cm	14.4cm	径 6cm 高 7mm	形態、調整外側の施削とも27と同じである。	胎土一精良な粘土を使用するが中に少量の砂粒が含まれる。 色調一灰茶色	内面に炭素を吸着さす。(内黒)。高台内に田井?そして杯外側に限?の墨書きがある。
32	4.7cm	13.9cm	径 7.5cm 高 7mm	同上	胎土一精良な粘土の中に少々の砂粒を含む。 色調一灰茶色	内面に炭素を吸着さす。(内黒)。高台内に墨書きが見られる。
33	4.7cm	15.3cm	径 7.6cm 高 6mm	形態、調整、施削は27と同じであるが11時端面、内側には凹がまわる。	胎土一精良な粘土の中に少々の砂粒を含む。 色調一灰茶色	内面に炭素を吸着。

No.	法 量			形態及び調整	胎土及び色調	備考
	器高	口径	高さ			
34	4.7cm	復元 12cm	径 6.5cm 高 5mm	形態、調整は同じであるが、外周の施削は少し深く26と同じである。端面内側に浅い凹があり周囲をまわる。	胎土一精良な粘土の中に少量の砂粒を含む。 色調一灰茶色	内面に炭素を吸着。
35	4.6cm	復元 13.4cm	径 7.6cm 高 6mm	形態、調整とも同じであるが、外周の施削は9の様に細かいものではなく、大きく削ってある(右→左)。	胎土一精良な粘土の中に少量の砂粒を含む。 色調一灰茶色	同上
36	4.8cm	14.1cm	径 8.3cm 高 5mm	同上	胎土一精良な粘土の中に少量の砂粒を含む。 色調一灰茶色	同上
37	4.6cm	13.4cm	径 7cm 高 7mm	形態、調整とも同じであるが、施削の方向がやや異なり左→右である。	胎土一精良な粘土を使用。 色調一灰茶色	同上
38	4.2cm	復元 13.5cm	径 6.7cm 高 5mm	形態、調整とも27と同じであるが、施削の方向は右→左である。	胎土一精良な粘土の中に少量の砂粒が含まれる 色調一灰茶色	内面に炭素を吸着する。(内側)
39	4.5cm	13.5cm	径 6.6cm 高 7mm	形態、調整とも27と同じであるが、施削は、細く左→右斜め下方に向かってある。端面内側に浅い凹があり周囲をまわる。	胎土一精良な粘土を使用 色調一灰茶色	同上
40	4.9cm	復元 13.8cm	径 8.2cm 高 6mm	形態、調整とも27と同じである。施削は右から左へ2段に削ってある。	胎土一砂粒の少ない精良な粘土を使用。 色調一灰茶色	同上
41	4.4cm	復元 16cm	復元 径 8.4cm 高 4.5mm	形態、調整とも27と同じである。施削の方向は右→左である。	胎土一精良な粘土を使用 色調一灰茶色	同上
42	4.1cm	13.4cm	径 7.2cm 高 5mm	形態、調整とも27と同じである。施削はやや強である。	胎土一精良な粘土を使用する。 色調一灰茶色	同上
43	5.1cm	復元 15.8cm	径 8.2cm 高 7mm	形態、調整とも27と同じである。施削は2段に削って削られている。左→右	胎土一精良な粘土を使用する。 色調一灰茶色	同上
44	4.8cm	復元 14.3cm	復元 径 6.8cm 高 1.2mm	形態、調整とも27と同じである。施削の方向は左→右である。	胎土一精良な粘土を使用する。 色調一灰茶色	同上
45	5 cm	14cm	径 7.5cm 高 7mm	形態、調整とも27と同じである。施削の方向は右→左で2段削である。端面内側に浅い凹があり周囲を離す。	胎土一精良な粘土を使用する。 色調一灰茶色	同上
46	4.9cm	14.7cm	径 7.3cm 高 8mm	形態、調整とも27と同じである。施削の方向は左→右で2段削である。	胎土一精良な粘土を使用。 色調一灰茶色	同上

No.	法 量			形 態 及 び 調 整	胎 土 及 び 色 調	備 考
	器 高	口 径	高 台			
47	5.1cm	15.2cm	径 8 cm 高 5 mm	形態、調整とも27と同じである。施削は細かく左から右方向である。	胎土—精良な粘土を使用 色調—灰茶色	内面に炭素を吸着する。(内 黒)
48	4.8cm	13.8cm	径 6.5cm 高 1.3cm	形態、調整とも27と同じである。内面に放射状の施削跡がされており、外側部には、施削がされ、さらに上をヨコナギがされている。端面内面に浅い凹があり周囲を廻る。	胎土—精良な粘土を使用す る中に少量の砂粒 が含まれる。 色調—灰茶色	内面は、調整された後、ウ ルシ状のものが塗られている。
49	4.3cm	復元 14cm	径 7.1cm 高 6 mm	内面は全体が剥離している為不明である。外面も剥離しているが、施削痕が残っている。左→右	胎土—精良な粘土の中に少 量の砂粒が含まれる 色調—灰茶色	炭素の吸着は見られない。

土師器・杯

No.	法 量		形 態 及 び 調 整	胎 土 及 び 色 調	備 考
	器 高	口 径			
50	3 cm	復元11.8cm	やや平たい底部より、斜め上方に広がる口縁を持つ口縁部近くは、外広がりのゆるい段を持つ。内面及び外面は、ヨコナギ施設されているが、外面底部には指圧痕が残る。	胎土—精良な粘土を使用す るが中に少量の砂粒 も含まれる。 色調—灰茶色	
51	2.8cm	11.2cm	やや平たい底部より、斜め上方に広がる口縁を持つ端面は丸くなるが、外面口縁下には、指による凹が廻り段状になっている。内面、外面はヨコナギ調整されているが、外面底部は指圧痕が残る。	胎土—精良な粘土の中に少 量の砂粒が含まれる 色調—灰茶色	
52	2.8cm	11.2cm	同 上	胎土—精良な粘土の中に少 量の砂粒が含まれる 色調—灰茶色	
53	2.9cm	11.3cm	同 上	胎土—精良な粘土を使用。 色調—灰茶色	
54	2.8cm	11.1cm	同 上	胎土—精良な粘土を使用。 色調—灰茶色	
55	2.7cm	11.5cm	同 上	胎土—精良な粘土を使用。 色調—灰茶色	
56	2.9cm	11.8cm	同 上	胎土—精良な粘土を使用。 色調—灰茶色	
57	3.4cm	11.4cm	同 上	胎土—精良な粘土を使用。 色調—灰茶色	器体は、やや丸みを もつ。
58	2.6cm	12.2cm	平たい底部より、斜め上方に広がる口縁を持つ。端面内面は小さな凹が廻り外面は指圧によりくの字状の段になる。内面、外面はヨコナギ調整されているが外面底部は、指圧痕が残る。	胎土—精良な粘土を使用。 色調—灰茶色	

No.	法 量		形 態 及 び 調 整	胎 土 及 び 色 調	備 考
	器 高	口 徑			
59	2.8cm	11.9cm	平たい底面より、斜め上方に広がる口縁を持つ。端部内面は小さな凹が廻り外面は指圧によりくの字状の段になる。内面、外面はヨコナデ調整されているが、外面部は、指圧痕が残る。	胎土—精良な粘土を使用するが中に少量の砂粒を含む。 色調—灰茶色	
60	3.2cm	11.9cm	同 上	胎土—精良な粘土を使用するが、中に少量の砂粒を含む。 色調—灰茶色	器体は全体に丸みをもつ。
61	2.9cm	11.5cm	同 上	胎土—精良な粘土を使用。 色調—灰茶色	
62	2.9cm	復元11.4cm	形態、調整ともほぼ同じであるが、外面部下には段はさほどない。	胎土—精良な粘土を使用。 色調—灰茶色	
63	2.5cm	11.6cm	平たい底面より、斜め上方に広がる口縁を持つ。外面は指圧による段は、さほどなく、ややくぼむだけである。内、外面のはほとんどは、ヨコナデ調整されているが、外面部は、指圧痕が残る。	胎土—精良な粘土を使用。 色調—灰茶色	
64	2.9cm	11.3cm	やや平たい底面より、斜め上方に広がる口縁を持つ。その横面はさくくなっている。外面部下には指圧によるややゆるい段を持つ。内、外面の調整はヨコナデであるが、外面部は指圧痕が残る。	胎土—精良な粘土を使用するが、中に少量の砂粒も含まれる。 色調—灰茶色	
65	2.7cm	11.45cm	同 上	胎土—精良な粘土を使用する。 色調—灰茶色	
66	2.8cm	11.4cm	同 上	同 上	
67	2.8cm	11.9cm	形態、調整とも50とも同じである。外面の段は、やや大きいくぼむ。	同 上	
68	3.1cm	復元11.8cm	同 上	同 上	
69	2.9cm	11.45cm	形態、調整とも50と同じである。口縁端部内面に、小さな凹状の線が廻る。	同 上	
70	2.9cm	11.3cm	同 上	同 上	
71	2.9cm	11.8cm	形態、調整とも50と同じであるが、口縁端部内面にやや幅の広い凹が廻る。そして外面には指圧によるくの字のへこみが後状になっている。	同 上	

No.	法量		形態及び調整	胎土及び色調	備考
	器高	口径			
72	3 cm	11.9cm	形態、調整とも50と同じである。口縁端部に重っては、円ではなく外面に指圧による段状のへこみがある。	胎上一精良を粘土を使用する。 色調一灰茶色	
73	3 cm	11.4cm	同上	同上	
74	2.9cm	12.2cm	形態、調整とも50と同じであるが、口縁端部に円は見られないが、小さいへこみがみられる。また外面には、指圧による段が見られる。	同上	
75	2.9cm	11.2cm	同上	同上	
76	3 cm	11.8cm	形態、調整とも50と同じであるが、端面は丸身を持つ。外面には小さくゆるい段がある。	同上	
77	3 cm	11.6cm	同上	同上	
78	3 cm	11.6cm	形態、調整とも50と同じである。外面には指圧による段が見られる。	同上	
79	2.8cm	11.6cm	形態、調整とも50と同じである。外面には小さくゆるい段がある。	同上	
80	3 cm	12cm	形態、調整とも50と同じであるが、口縁端面内側に小さな凹が囁り、外面も段をなす。	同上	
81	3 cm	11.6cm	同上	同上	
82	3 cm	12.1cm	形態、調整とも50と同じである。しかし、端面はやや丸い。外面には、指圧による段をもつ。	同上	
83	3 cm	12.1cm	同上	同上	
84	2.8cm	11.8cm	同上	同上	

No.	法 量		形態及び調整	胎上及び色調	備考
	高	径			
85	2.7cm	11.6cm	やや平らな底部より、斜め上方に広がる口縁を持つ 口縁内側には一条の浅い凹が廻る外側は、指ナデによるゆるい凸がある。内、外側ともココナデであるが、底部に至っては指圧痕が残る。	粘土-稍良の粘土を使塗するが、中に少量の妙粉が含まれる。 色調-灰茶色	
86	2.6cm	復元11.6cm	同上	同上	
87	2.5cm	復元11.6cm	同上	同上	
88	2.8cm	復元10.4cm	やや平らな底より、斜め上方に広がる口縁を持つ その端面はやや丸い。形態、調整とも同じである。	同上	
89	2.6cm	11.6cm	形態、調整とも50とほぼ同じであるが、その端面は少し横に広がり浅い凹をもつ。	同上	
90	3.3cm	11.6cm	形態、調整とも50と同じである。その端面は丸くなっているが、内側に浅い凹があり周囲をまわっている。	同上	
91	2.8cm	復元11.1cm	同上	同上	
92	3.4cm	11.8cm	同上	同上	
93	3.1cm	11.5cm	同上	同上	
94	2.8cm	11.4cm	同上	同上	
95	3 cm	11.8cm	形態、調整とも50と同じであるが、口縁の内側端部近くには浅い凹凸がある。	同上	
96	2.7cm	11.3cm	形態、調整とも50と同じであるが、口縁の内側端部に一条の凹が周囲をまわっている。	同上	
97	3 cm	10.9cm	同上	同上	

No.	法 墓		形 總 及 び 法 墓	胎 土 及 び 色 調	備 考
	器 高	口 径			
98	3.3cm	11.1cm	形態、調整とも50と同じであるが、口縁の内側端部に一条の凹が開削をまわっている。	胎土—精緻な粘土を使用するが、中に少量の砂粒が含まれる。 色調—灰茶色	
99	2.9cm	11.1cm	同 上	同 上	
100	3.1cm	11.5cm	形態、調整とも50と同じであるが、口縁の内側端部にやや幅広い一条の凹が開削をまわっている。	同 上	
101	3 cm	11.6cm	同 上	同 上	
102	3.2cm	11.3cm	形態、調整とも50と同じであるが、口縁端部は丸くなっている。内側には浅い一条の凹が開削をまわっている。	同 上	

灰釉陶器

No.	法 墓			形 總 及 び 調 整	胎 土 及 び 色 調
	器 高	口 径	高 台		
103	4 cm	13.6cm 径 7 cm 高 5 mm		やや丸みを持つ器体は、斜め上方に広がる口縁を持つ。その縁部はさらに横方向へ広がる。内面、外面の中ほどまでは、乳白色の釉をかけてある。外周高台近は、施釉されている。	胎土—砂粒混入を少し含む 色調—灰白色
104	3.1cm	復元17.2cm 径 7.1cm 高 16.5mm		平らな底部より、斜め横方向に広がる口縁を持つ。内、外面の底部除く部分には、乳白色の釉をかけてある。外周高台近は、施釉されている。	胎土—砂粒混入を少し含む 色調—灰白色

土師質・鍋・異形土器

No.	法 墓			形 總 及 び 調 整	胎 土 及 び 色 調
	器 高	口 径	腹 径		
105	不明	復元17.4cm	復元18.8cm	器体はやや削ぎで、縁部近くで少しすぼみ斜め上方に広がる口縁を持つ。その口縁部近くでは、横方向に広がる。縁部内面と口縁の内、外面はヨコナデがされるが、縁部外面は施釉されている。(右→左)	胎土—金云母を含むことともに砂粒も少し含まれる。 色調—茶色
106	不明	不明	復元 径 15cm 高 3 cm	やや内側にカーブを描く高台で、穴が見られる。内、外面ともヨコナデがされている。	胎土—砂粒の多い粘土を使用。 色調—灰茶色

第5章 まとめ

今回の報告にあげた遺構は、古墳時代前期・平安時代後半・中世に属するものである。豊中遺跡における従来の調査では、古墳時代から平安時代の間の遺構は発見されていない。今後の調査によりそれは埋められるであろう。奈良時代に属する遺物は発見されているので、その可能性は充分にある。

第1地点は小字名が「大福寺」の一角にあたる部分である。このため、当初寺院に關係した遺構・遺物等の発見を予想したのであるが、結果的には、それらしきものは確認できなかった。第2地点の場所も含め、付近における調査では、多数の瓦（片）が出土しているので、文書等の記録では残っていないが、寺院の存在を疑う余地はないであろう。発見された瓦より、寺院の存続した期間は、平安時代末から室町時代位だと推定される。寺域・寺院の規模は不明であるが、本地点から関連遺構が発見されていないことにより、大規模なものではないであろう。今後の調査に期待するところである。

第1地点溝状遺構として報告した遺構は、調査地域の約1/2を占めるが、それはゆるやかな起伏部分の上部を削平されて残った斜面の一部と考えることも可能である。従来の調査において見られたことだが、豊中付近では、中世からしくは近世に起伏部の高い部分を削平してフラットな面を造っているようである。したがって遺構も、深く掘られたものは、その跡を残しているが、浅いものはかろうじて底部分のみ残っているか、全く失なわれてしまっているものと思われる。

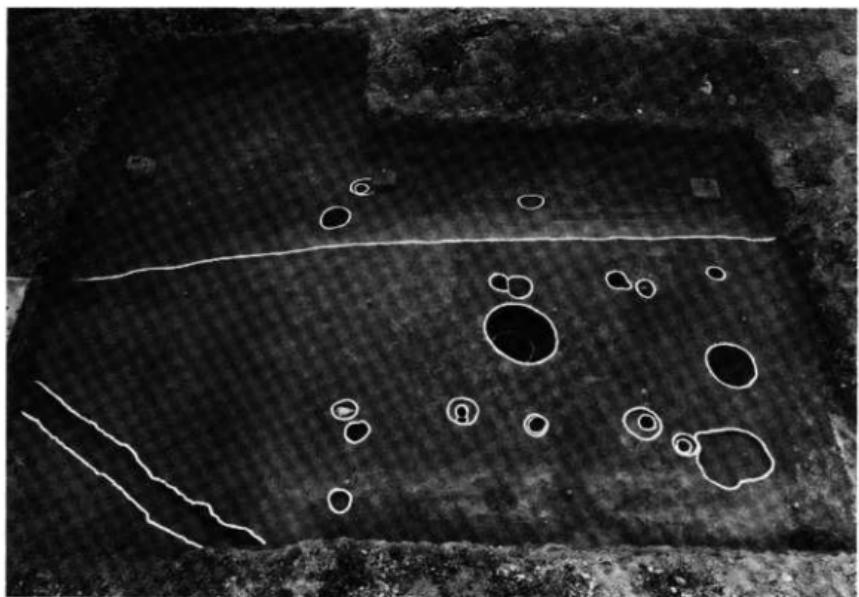
豊中遺跡の特徴の一つに多数の井戸が検出されていることがあげられる。現在までのところ31基¹¹⁹、今回報告の4基を加えて35基発見されたことになる。時代別の内訳は、古墳時代7、平安時代2、中世22、近世1、不明3である。又構造からみると、古墳時代のものは素掘り、平安時代のものは板材を使用したものや曲物、中世は、土釜・曲物・石で作ったもの、あるいはそれらを組み合わせて作ったものなどで庶民が使用したと思われる。第2地点井戸1は平安時代に属するものであるが、このような四隅に柱を立て、横棟をわたし、外側に横板を並べた構造の井戸は今回初めて検出され、その規模から考えて、庶民が使用していたとするよりも、それより上級階層（有力農民？）の所有になるものと思われる。ただし付近からは、建物跡が検出されなかつたので、建物のことについては不明である。井戸埋土の中程に完型品の土器を含め、多量の土器（日用雑器）が棄てられていた。これは井戸が自然に埋もれたのではなく、人為的に埋没せられたことを示すものであり、その時期は平安時代後半で瓦器出現以前だと思われる。完型品の土器を棄てて井戸を廃絶させるということは何を意味するのであろうか。それは、井戸所有者の没落を考

えることができる。ちょうど時期的に律令体制の崩壊、荘園制形成期であり、律令体制の崩壊に伴う没落として社会構造の変化の中に位置づけられる。さて、この完型品の中には、裏面に墨書きされた黒色土器が数点含まれていた。それは「田井」「山井殿」と記されており、人名でしかも井戸の所有者と考えられる。さらに推測を進めるならば、この「田井殿」こそ没落していった人物ではないだろうか。

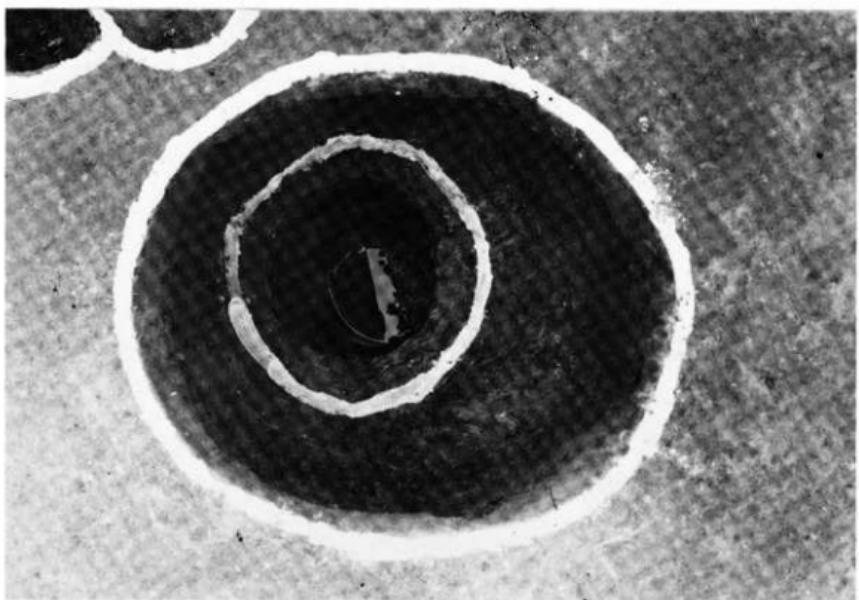
豊中遺跡内における調査は、住宅建設に先立つ調査が主であるため、その調査面積は、全体から見れば、ごく一部であり、遺跡の全体像を浮かびあがらせるのはまだまだである。資料報告という意味で本書を作成した。

- 注① 塚市四ツ池遺跡、高石市大園遺跡、和泉市池上曾根遺跡、泉大津市豊中遺跡・古池遺跡・板原遺跡、岸和田市采ノ池遺跡、土生遺跡、などがあげられる。
- 注② 泉大津市では、池上曾根遺跡、七ノ坪遺跡・古池遺跡・穴師遺跡・穴田遺跡などがあげられる。
- 注③ 和泉市史第一卷 1965 和泉市史編纂委員会
- 注④ 大園遺跡発掘調査概要 1977 高石市教育委員会
- 注⑤ 観音寺山共生集落調査概報 1968 観音寺山遺跡調査団
- 注⑥ 信太山遺跡調査概報 1966 信太山遺跡調査団
轟山地区 信太山遺跡(その2) 1970 和泉市教育委員会
- 注⑦ 七ノ坪遺跡発掘調査概要 1974 大阪府教育委員会
- 注⑧ 小笠原好彦氏は、掘立柱建物は新しい技術による建築で、高塚墳墓造営者との結びつきを考えている(畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開 考古学研究 第25巻 第4号)
- 注⑨ 新版 池田市史 概設篇 1971 池田市史編纂委員会
- 注⑩ 古池北遺跡調査概要 1974 大阪府教育委員会
豊中・古池遺跡発掘調査概報 1976 豊中・古池遺跡調査会
豊中遺跡発掘調査概要Ⅰ 1978 泉大津市教育委員会

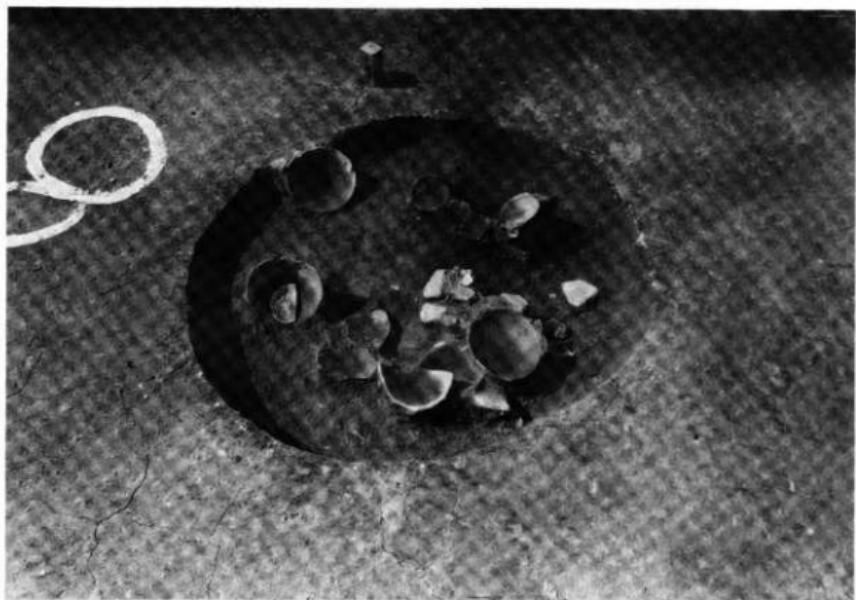
図 版



第1地点 遺構全景



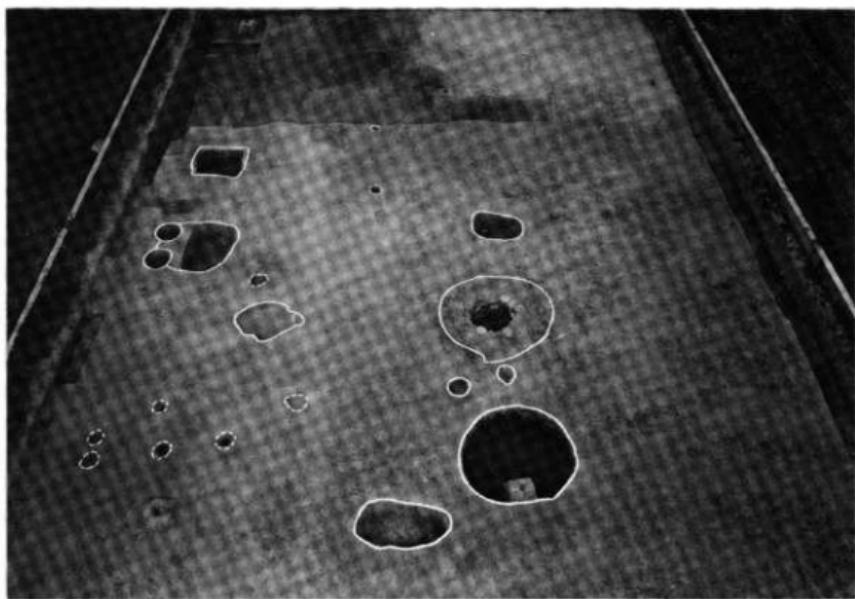
第1地点 井戸1



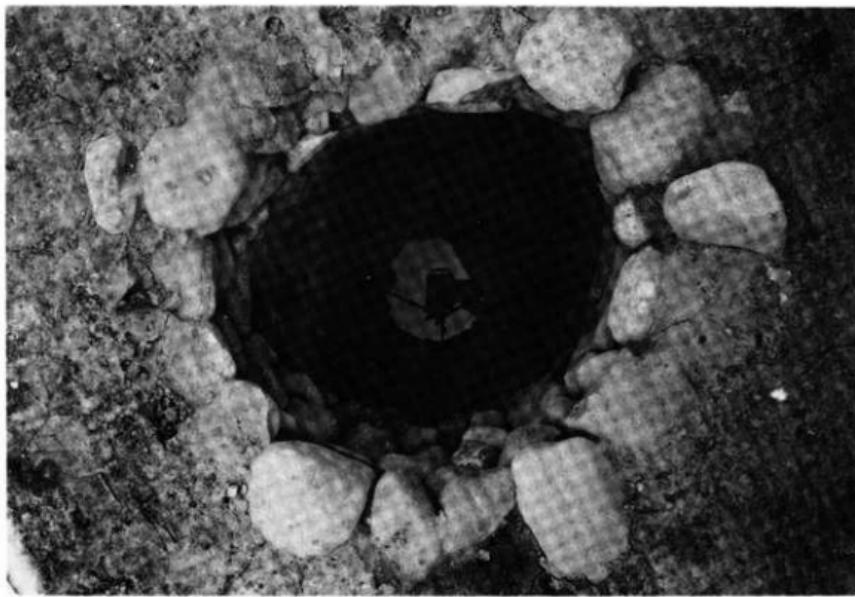
第1地点 井戸1



第1地点 井戸1



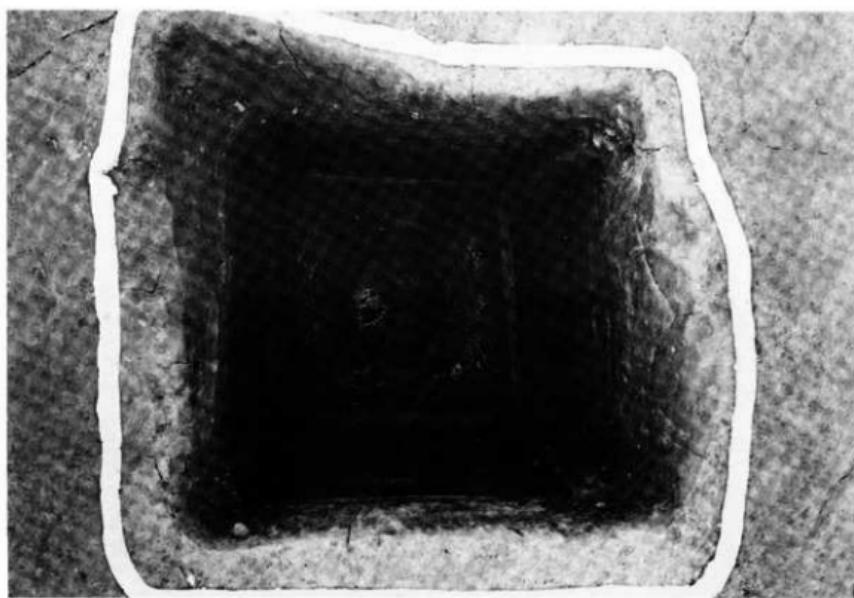
第2地点 遺構全景



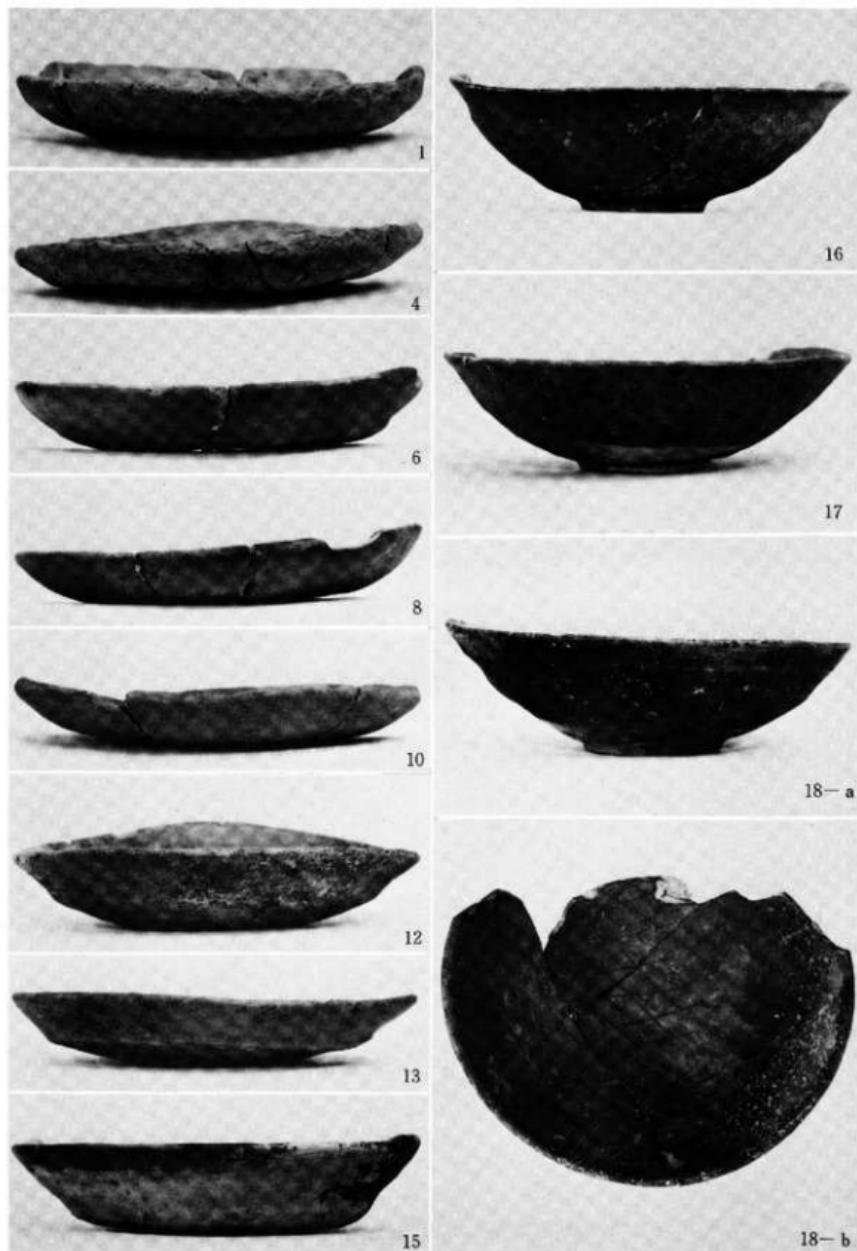
第2地点 井戸



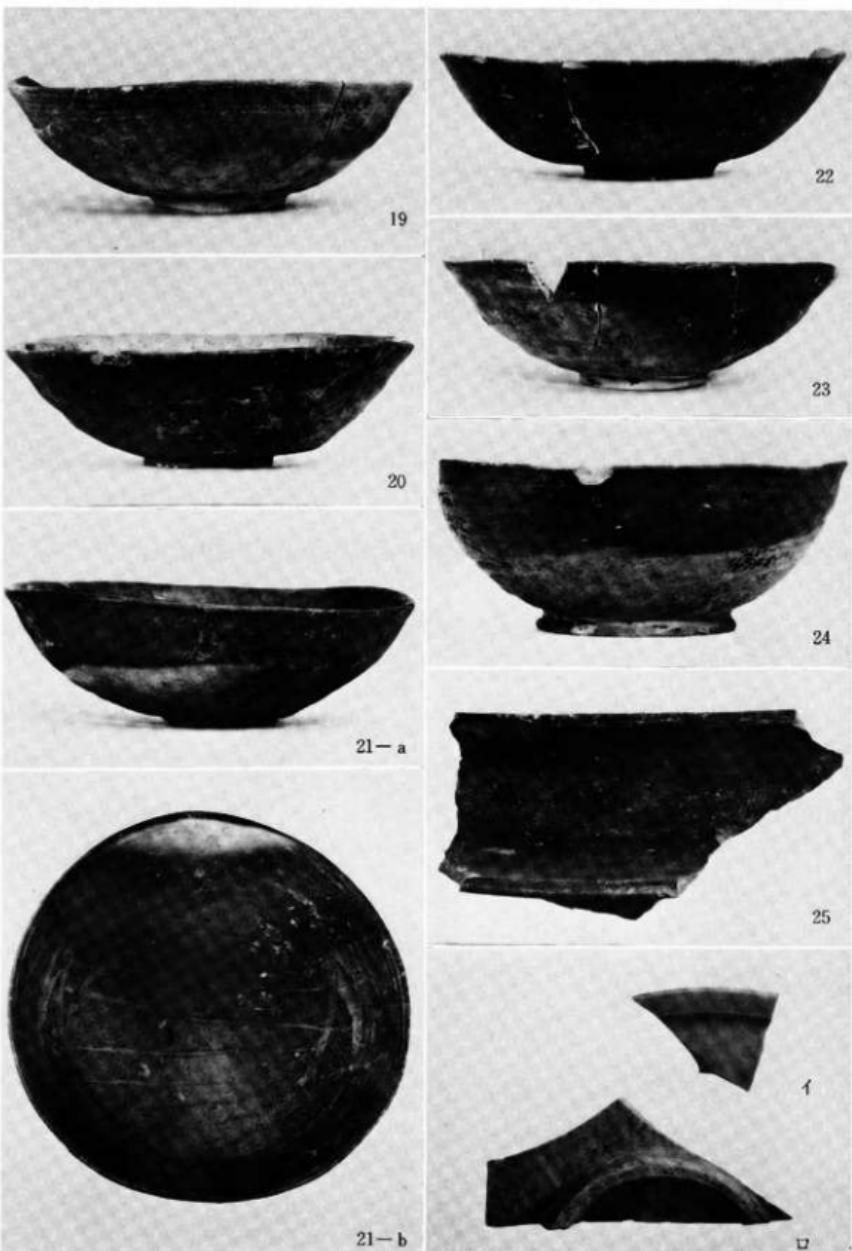
第2地点 井戸



第2地点 井戸



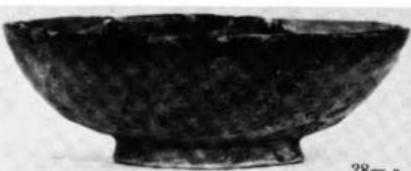
第1地点 遺物



第1地点 造物



26-a



28-a



26-b



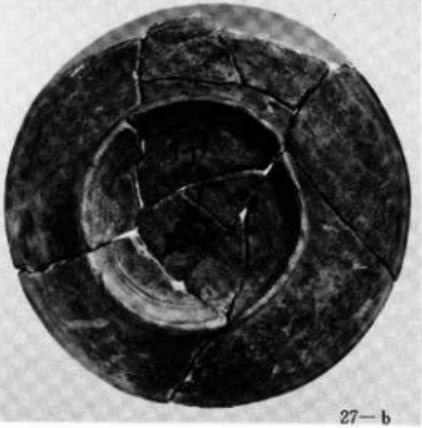
28-b



27-a



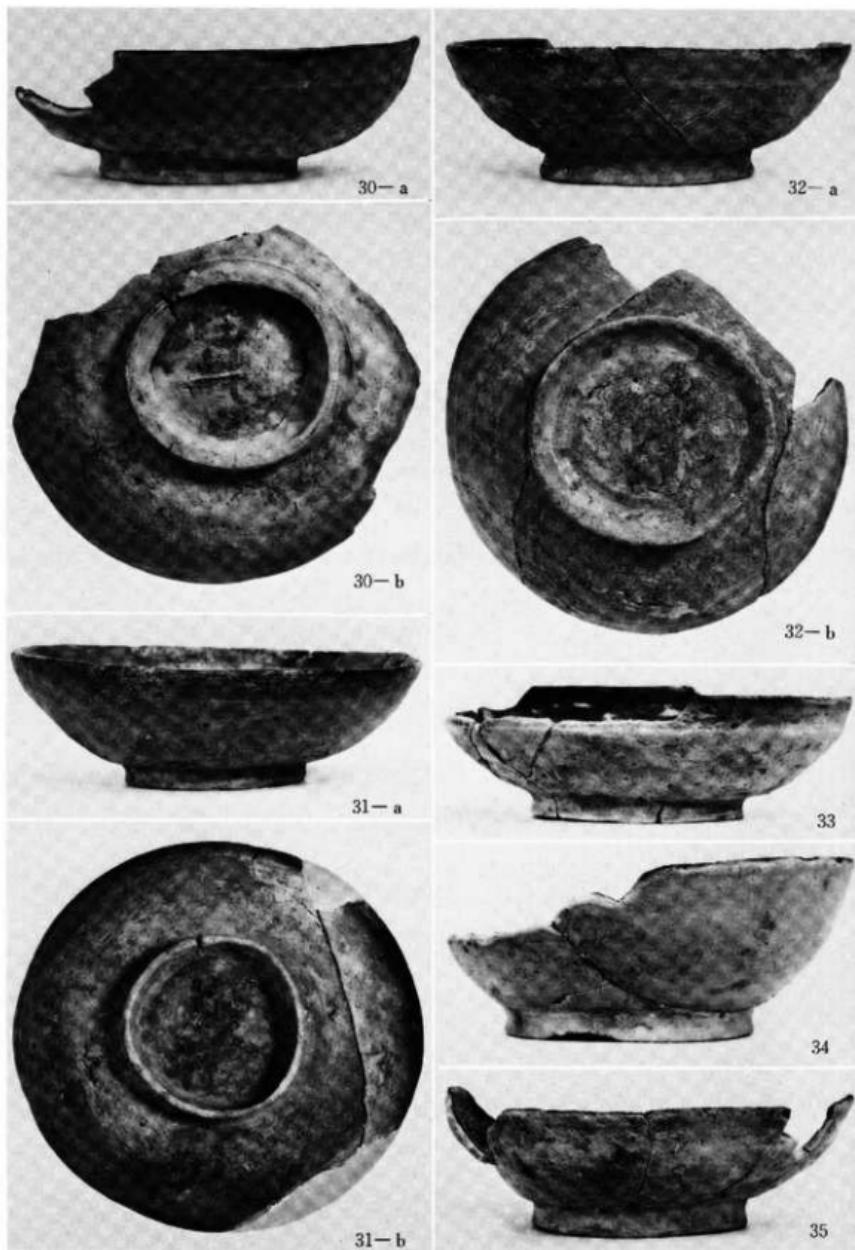
29-a



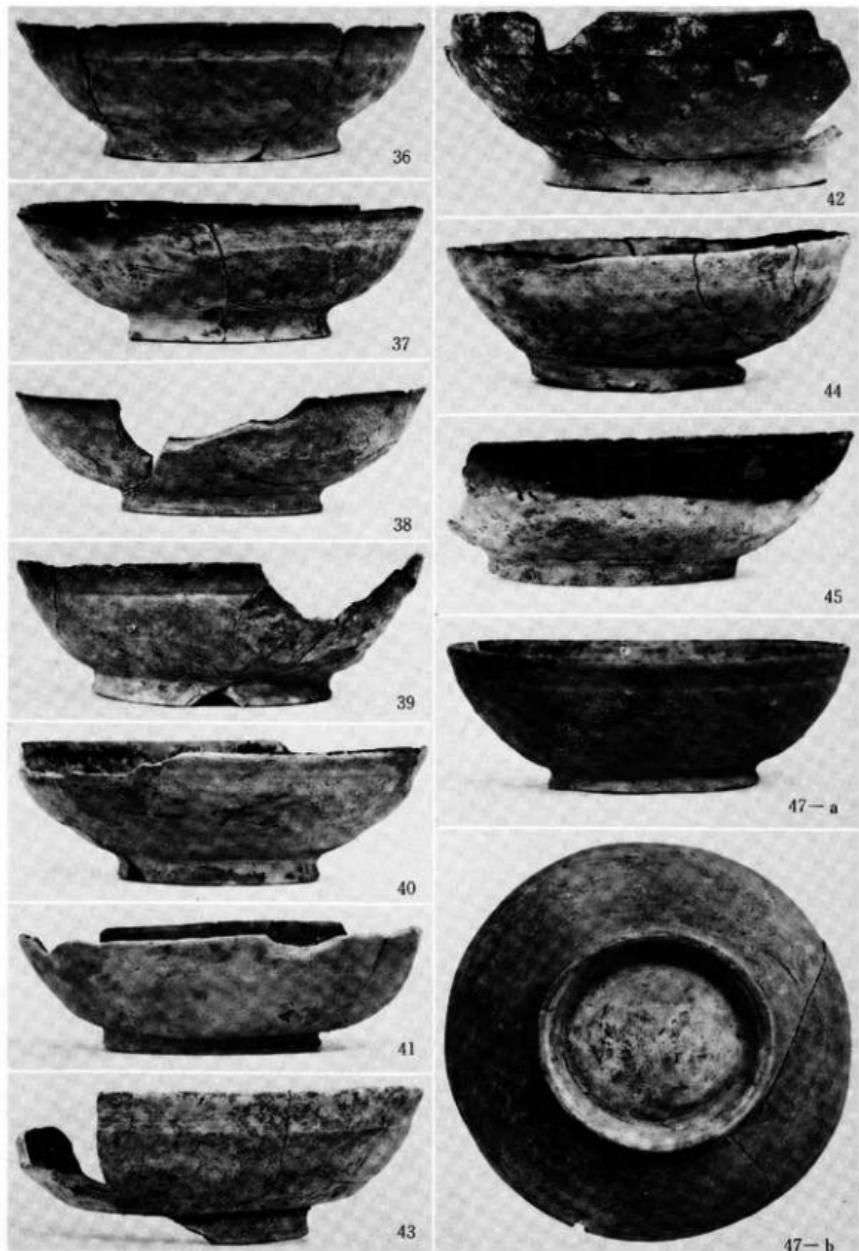
27-b



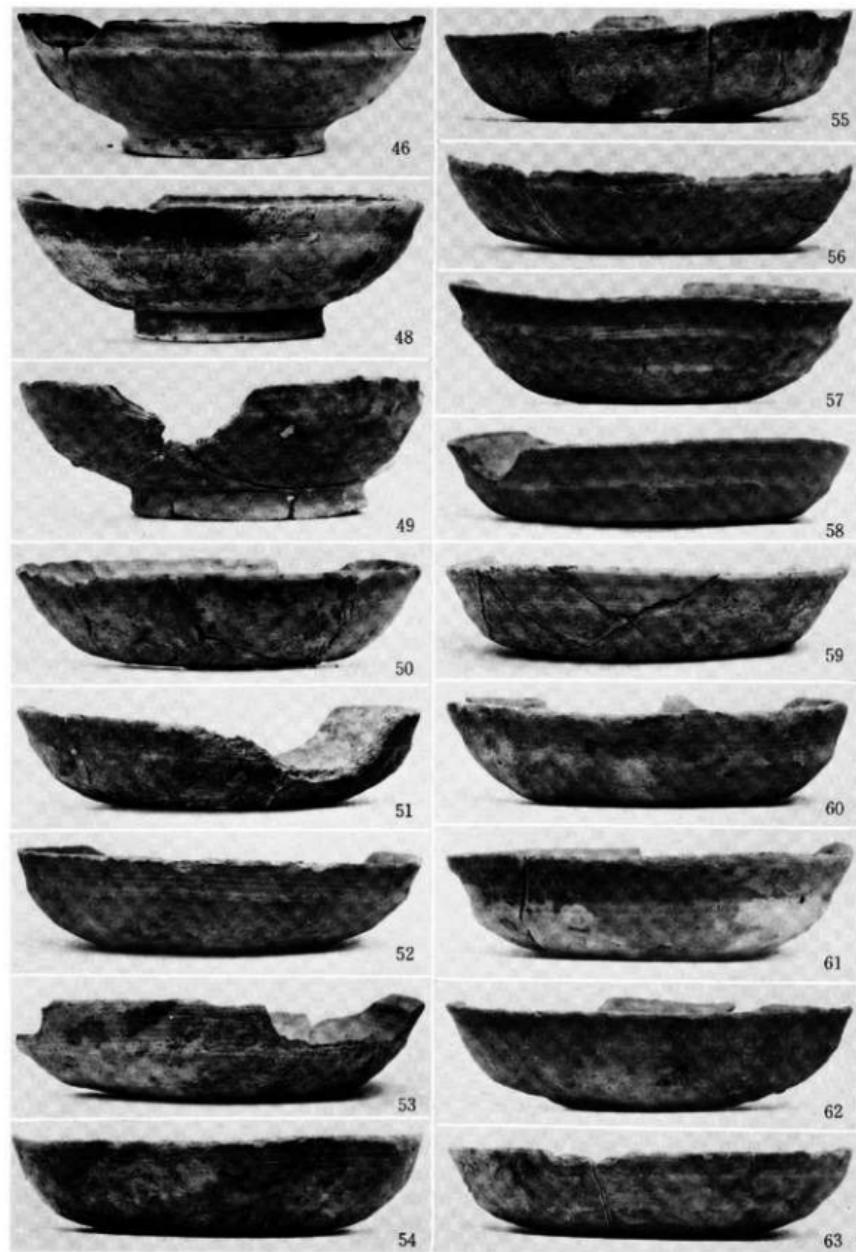
29-b

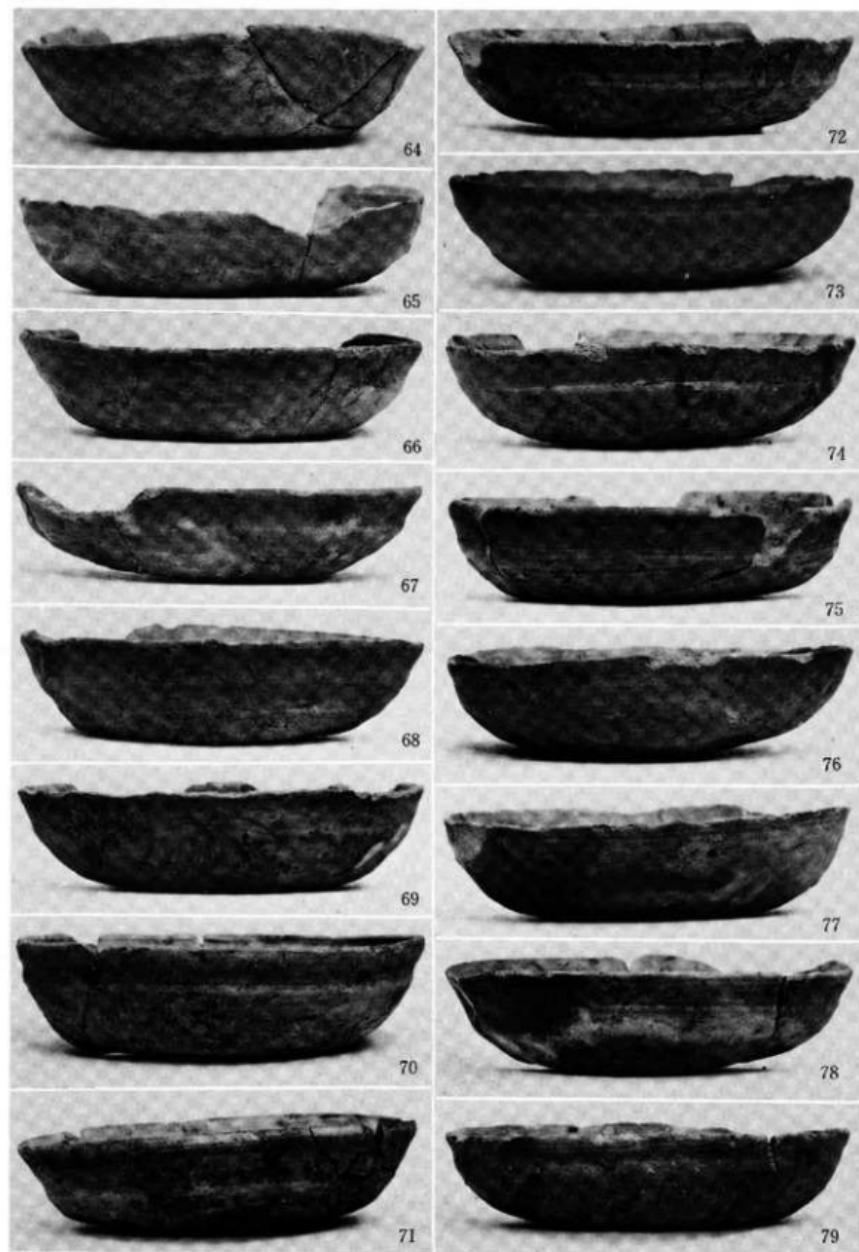


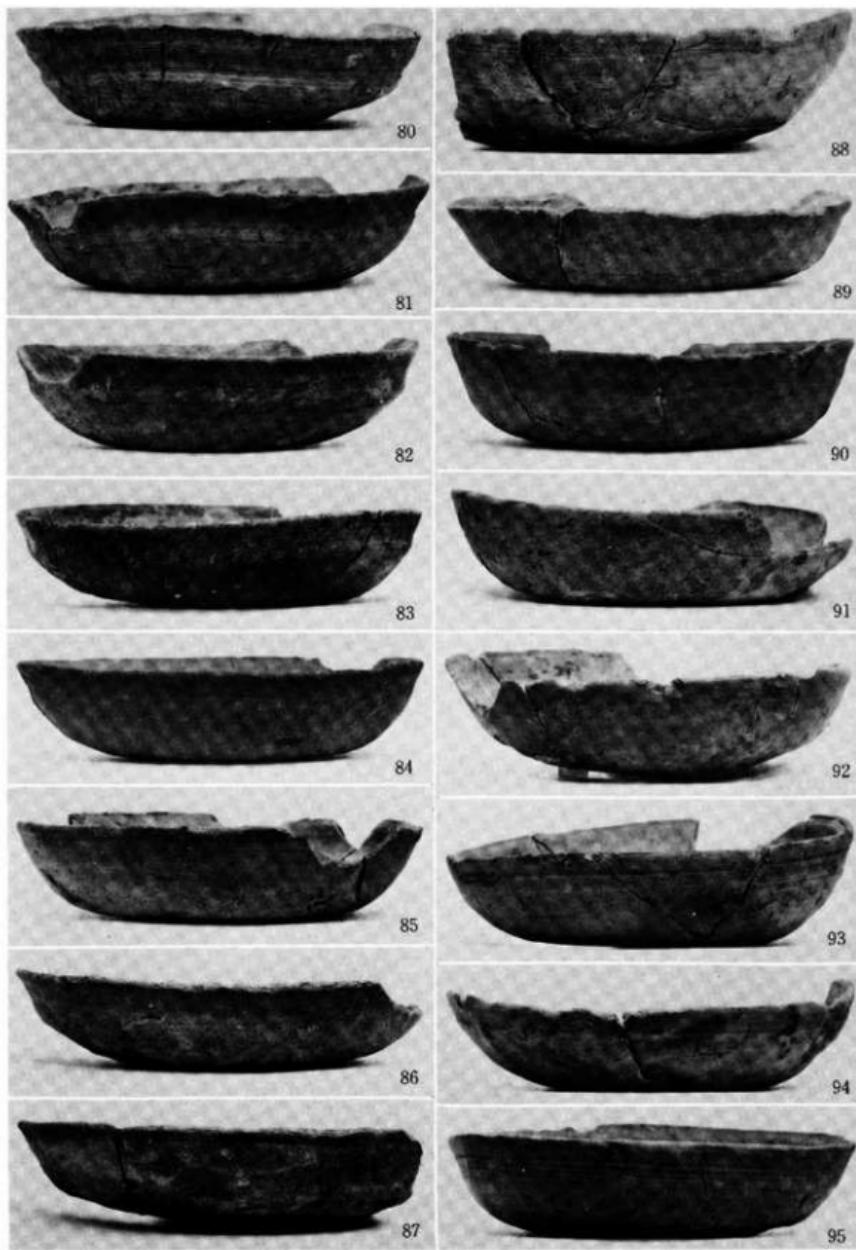
第2地点 遺物



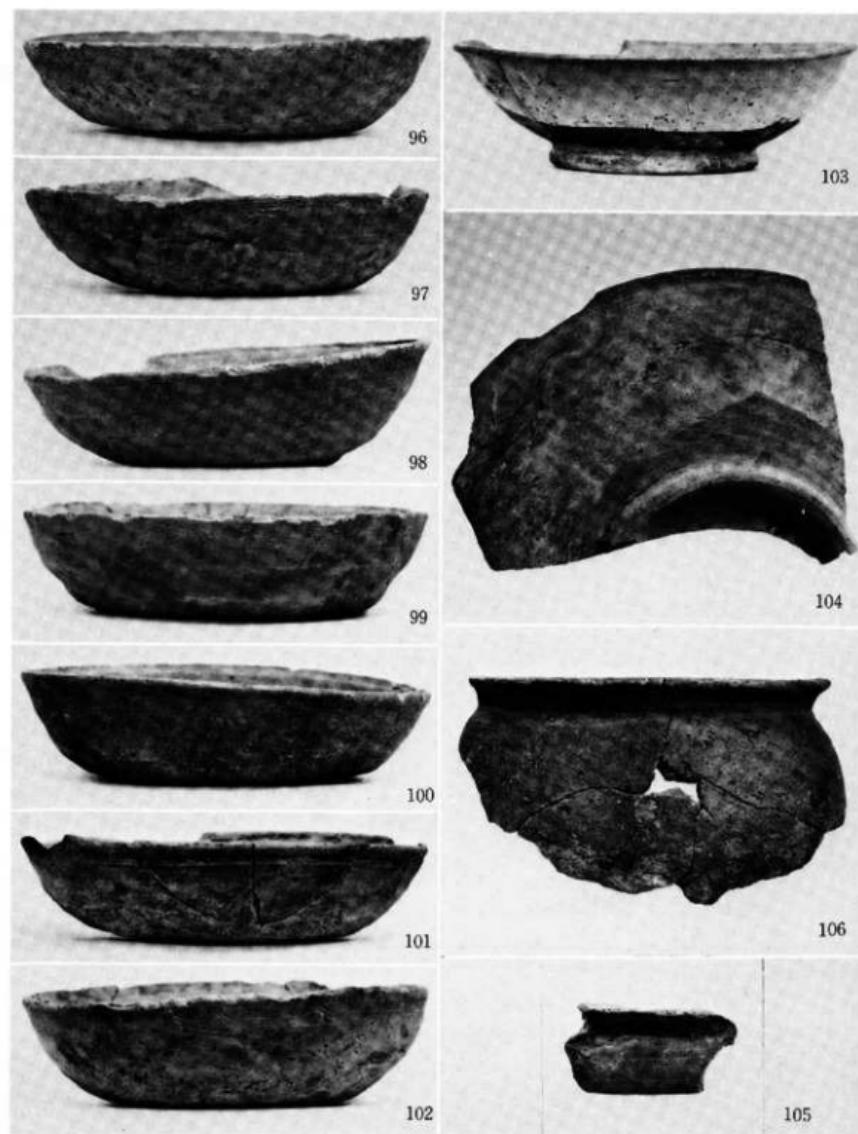
第2地点 遺物







第2地点 造物



第2地点 遺物

